
東方反乱録 ~ revenge battle! ~

靈刃村雨丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方反乱録 (revenge battle)

【Nコード】

N9161N

【作者名】

霊刃村雨丸

【あらすじ】

妖怪や人間やそれ以外が住む世界、幻想郷。幻想郷には巨大な境界があり、外の世界と遮断されている。そう、普通はよっぽどのことが無い限り幻想郷には何も入って来ることができない。しかし、何かがこの幻想郷に侵攻し、一部の者に力をもたらした。そして・

注意・・・大きく崩壊を起こしているキャラが入るのでキャラ崩壊ふざけんな、もしくは東方って何？美味しいの？とか、かなり面白

い話が見たい！という方はおそらく「戻る」ボタンを押した方が良
いかと思われます。

白玉楼（前書き）

これは弾幕で有名な東方の二次創作です。ちょっと知識がないとつらいかも知れません。

白玉楼

白銀の中で、半人の少女が倒れて動かない幽玄の姫を見下ろしていた。紅き館で、黒のメイドが翼を生やし幼き吸血鬼を銀の鎖で縛り付けていた。入ると必ず迷う竹林の中で、蛭が蟲を操り夜雀が狂気の歌声を響かせて兎を苦しめていた。また、湖に住む馬鹿な妖精と友達である冬の妖精は、かつて友達だった妖精によって動けなくなっていた。そして、漆黒の闇の中に、病的に白く巨大な剣を携え微笑む少女がいた。

忘れ去られた物が集まる忘れ去られた世界、幻想郷。今日も平和であつたため、幻想郷の神社の一つ、博麗神社の巫女である博麗霊夢は日課である神社の掃除をしていた。勿論、独りでだ。

「はあく。今日も暇ね。暇すぎて何か事件でも起きて欲しいなんて思つたのは久しぶりだわ。」

そして思わぬ来客が訪れた。しかも、上からだ。

「あら、お花見以来で久しぶりじゃない。え〜つと、ん〜・・・」
しかし、返答は囁み合つてなかつた。

「「助けて！幽々子様が！幽々子様が！！」」

「ああ、プリズムリバー三姉妹じゃない。それと、背負っているポロボロの姿は・・・え？」

やってきたのは騒音三姉妹、プリズムリバーと白玉楼に住む、西行寺幽々子であつた。

「ふむふむ、なるほどね。でもあの半人前の剣士が襲つとは思えないわね。」

霊夢がぼやく。内訳はこうだった。たまたま幽々子のもとで演奏しようとして通り向かったら西行寺幽々子の家の庭師である魂魄妖夢となり激しい戦いをしていたと言う。

「私だつてびつくりしたわよ。私とメルランで救出したんだけど、ルナサがまだ中で戦っているのよ。」

「魂魄妖夢、あの瞳に正気は無かったわ。それに、異常なほど強かつたし。」

リリカとメルランが口を挟む。そして霊夢は決意した。

「そうね、まだ中で戦っているならば急がなきゃ。リリカとメルランは神社に残つて。」

「え！行くんですか？」「当たり前じゃない。」

リリカの質問に即答する。そしてメルランが、

「気を付けなさい。今の魂魄妖夢は何かが違います。」

「分かつたわ。警戒して行く。」

神社の外は、風が強かった。これはただの気候だろうか？それとも

白玉楼（後書き）

こんにちは、弾幕野郎です。最近友達に「書いてみたら？」と言われたのでとりあえず書いてみました。まあはじめて書いたモンですから書いた後から気付きましたがちよつと展開が速いような気がします。後ある程度東方の知識がないと分からないかも。

不束者ですが、何卒よろしくお願いします。

白玉楼の裏で（前書き）

前回より文字数が増えています。それと敵の符は実際には存在しません。ご注意ください。あ、魔理沙はちゃんとあるよ！

白玉楼の裏で

霊夢が白玉楼へ飛び立ったのと同刻、魔理沙は未知なる恐怖に追われていた。

「くそ、どうなっているんだ！」

それは30分位前の話である。

魔理沙は暇を弄んでいた。魔理沙の親友であるアリスが新しく人形を開発中なため、遊びに行くにも行けず、紅魔館に行つて本を盗もうにも珍しく門番が仕事をしており入れなかった。

「はあ、暇だな。魔法の研究も一通り終わっているし、何しようか。そうだなあ・・・そういえば？」

二つの疑問が出た。一つは紅魔館の門番の発言である。

「ちよつと今はとても危険で入れそう・・・い、いえ！入れませんので帰ってください！ふっ飛ばしますよ!？」

あれはパチエが危険な魔法を作っていたからだと思つてミサイル撃つて帰つて来たけど、確か最近金月符「ロイヤルダイヤモンドリング」を完成させていたはずだ。

「おろ？魔法は完成させていたな。ならば何でえーと・・・門番焦つてたんだ？それに・・・湖に気配が無かつたな。普通なら、『あたいつてば最強ね!』とか言ってる筈なんだがな。」

そう、二つ目の疑問がこれだ。気配が無い。普通ならば森や湖の妖精が飛び回り、チルノが蛙を凍らしているはずだ。しかし、湖辺りには何も無かつた。

「思い返せば疑問だらけだな。今頃、あいつなら『また事件ね。退治しに行かなきゃ。』とか行つてる筈だ。まったく、この手の目的の分からない怪異は嫌いなんだがな。仕方ない、暇だしもう一回行つてくるか。」

かくして、魔理沙は霧雨魔法店を出た。

魔理沙が出てくるのを監視していた者がいた。

「ふふ、今度こそ復讐よ。この力さえあれば・・・」
その少女の瞳に正気は無い。

「ん？霧が濃いな。まいったな・・・」

魔法の森がある程度進んだ魔理沙の周りには霧が発生していた。しかし、魔法の森には文字通り魔力が存在する為霧なんて普通は発生しないはずだ。ならば、

「誰かが故意的に出したんだな。でもたとえ鬼の萃香でもこんなに密度濃く、しかも広範囲に体を分散できるわけが無い。それに、あいつは確か天界の緋想天にいる天子と遊んでいるんだったな。ならいつたい誰が・・・？」

考えようと立ち止まる瞬間、

「つと！あぶねえな！」

魔理沙は本能的に右に体を飛ばしていた。振り返ると五本の苦無が地面に刺さっているではないか。

さらに、

「くそ、またか！敵はどこだ！」

左にステップすると先ほどいた場所にまた苦無が刺さっていた。そして、

「そこか！マジックミサイル！」

動いた草むらにミサイルを撃った。ミサイルは着弾と同時に爆発してあたり一面を燃やす。しかし、何も無い。

「ふふつ、後ろよ」

声が聞こえたので後ろに振り返る。そこにいたのは、

「まさか・・・あの大妖精なのか・・・？」

闇に染まった見覚えのあるチルノの友達の大妖精だった。

「ご名答。その大妖精だわ。ちなみに苦無を打ち込んだのも私よ。」

「まさかお前が？笑わせるな。あの速度で打ち込めるはずが、」
魔理沙のスカートに穴が空いた。後ろの木には苦無が一本。すでに大妖精は投げた動作で腕が跳ね上がっていた。

「今の私にあなたは勝てると思う？」

「くっ……！魔空『アステロイドベルト』！」

星弾は四方八方から恐ろしい密度で大妖精に襲いかかっていく。しかし、魔理沙は声を聞いた。

「甘いわ。霧符『ミストボム』」

莫大な霧が圧縮され、そして展開した。展開の余波で星弾が吹き飛ばされ、しかし霧に吸収されたため新しい弾幕となり、魔理沙を襲う。

「な、なに！？馬鹿な！う、うわあああああ！」

魔理沙は絶叫した。

「こんなもんで倒れてもらっては困るわ。もっと抗いなさい。逃げてもいいのよ？追いかけるから。」

霧の星弾幕は大妖精が操作し、僅差で魔理沙に当てなかった。

「ッ！グラウンドスターダスト！」

魔理沙は爆発するピンを地面に投げつけ爆発させた。爆風が去った後にはもう魔理沙はいない。

「ふふ、逃げても無駄よ。」

白玉楼の裏で（後書き）

こんにちは。弾幕野郎です。読んでる人多分いないから自己紹介別に要らないよね！

今回二話目を出しましたが魔理沙主軸で霊夢進展無し。妖夢期待していた人はゴメンナサイ。あ、次は霊夢書くよ！

まあ今回の魔理沙の符は永夜抄と緋想天or緋想天則から拝借しました。ちなみに前者の方はかわせません。腕が足りません。でも最近永夜抄のEXTRAならクリアしました。妹紅強かった。

とまあこんな感じで次も多分出させていただきます。もしよければ感想に好きなキャラ出してくれたら載せられるかも知れません。多分サイドストーリーあたりで。

「別にこんなヤツなんか感想なんて書いてられるか。面倒くせえ。」
「と思っっている方もいますでしょうけど、若干ノリで書いているので助けてくれたらありがたい限りです。
では読者の皆様さようなら。」

白玉楼終結（前書き）

今回は会話が少なめです。あとルナサ信仰の人はゴメンナサイ。

白玉楼終結

「ふうん。自分の暗部にある願望、つまり心に『隙』がある人もしくは妖怪か何かの奴のその『隙』を具現化するのね。まあ、私に無いのは当然つたら当然なのかな・・・？」

「多分あなたは性格がさっぱり過ぎていて無いでしょうね。」

「それフォローになって無いわよ。」

「いいから黙って大人しくしてなさい。治療が出来ないでしょ。」

白玉楼でいつも通りな会話をしているのは巫女と半人の剣士と亡霊だ。巫女と剣士はかなりの負傷をしており、片方は切り傷だらけで巫女服もかなり破れている。もう片方はもう片方で痣だらけだ。どっちがどっちかはどちらが言うまでも無い。

霊夢は上空、と言っても地上5メートルぐらいを飛んでいた

「風が強くて上なんか飛べやしない。こんな天気は普通起きないわ。しかも雲の出所が白玉楼というのがねえ・・・」

だんだんと見えてくるのは白玉楼。しかし、今は暗い色をした雲が渦巻いている。幸い、道中に何も妖怪や人間やそれ以外の物には出くわさなかった為スムーズに付きそつだ。

「行っていきなり最終決戦なのはちよつと嫌だけど行くしかないわね。でも半人が幽霊を斬るなんて邪霊の類でも取り憑いたのかしら。」

疑問に思いながら、しかし飛行はやめなかった。

白玉楼の中、巫女の接近を感じていた人がいた。否、半人と呼ぶべきか。

「やっぱり来たか。だけでももう負ける訳にはいかない。」

そして空を見上げてこう言った。

「もう、半人前とは言わせない。」

「さて、庭に着いたけど誰かいないのかしら。普通この辺にいれば何かしら出るはずなんだけど・・・」

ぼやいた博麗霊夢の返答は上からだった。

「せや!」「つつ!」

間一髪でかわした霊夢が言う。

「何よ。上から奇襲なんてセコいわね。というよりあんた誰?なんか魂魄妖夢みたいな黒い魂魄妖夢は。」

「自分で答えを言ってるじゃない博麗霊夢。そう、私が『一人前』の魂魄妖夢よ。」

「へえ、『一人前』ねえ。やっぱり強くなったの?」

「今からあんたと戦うから分かるわよ。」

「やっぱり戦うのね。でも聞かせて。なんであいつを斬ったの?それとルナサは何処?」

「あのトランプペッターはそこ。私に勝てたら斬った理由を教えなさい。」

「決裂ね。覚悟しなさい。」

霊夢はいくつかの符を構える。対する妖夢は二本の刀。

「もう、半人前とは、言わせない。」

両者は激突した。

先手は妖夢だった。瞬間的な速度で接近し大きく踏み込んでリーチを伸ばしながらの袈裟斬り。慌てて霊夢は御祓いの棒でガード。しかし相手は既に刀を鞘に納刀しており左の貫手で掴み投げ飛ばす。投げ飛ばされた霊夢は空中で体を捻り体制を整えて着地。

「なんか格段に強くなっているわね。」

「よく棒が折れなかったこと。」

「当たり前じゃない。人間相手じゃないと折れないわよ。」

そう言いつつ乱射するのは博麗アミュレット。霊力を消費して走ってくる妖夢には意味は無いがそれは逆に言うと霊力を消費しなけれ

ばならない。相手が近づいてきたところを亜空穴で終点ワープを地面から垂直に穴を展開し、スライディングの要領で蹴りを叩きこんでからの昇天脚で真上に吹き飛ばそうとした。相手は読み通り近づいてきた。まだまだ相手も甘い。そう思いつつ順調に亜空穴の始点ワープを展開。霊夢は一瞬で消え、相手の足元にスライディングを入れる。が、

「甘いのはそつち。人符『現世斬』」

判定は妖夢勝ちだった。霊夢はもろに剣戟を喰らい最低限のガードはしつっ吹き飛んだ。

「くっ……！ なかなか効くわね。だけど次はそうは行かないわよ？」

霊夢は治療符で痛みだけを抑えて相手に向かって跳躍。途中で御札を前方にばら撒き博麗アミユレットも飛ばす。跳躍を下からダツシユで抜けた妖夢は剣技の一つ『弦月斬』を行い、剣筋が弧を描きながら霊夢に向かう。読みで霊夢はガードし、カウンターで博麗アミユレットを当て、亜空穴で上から飛び蹴りを行う。相手は飛び蹴りを喰らい吹っ飛び、跳ねた反動で空間に刀で切れ込みをいれ楔形の弾を飛ばす。技の反動で動けない霊夢は接近を諦めその場でガード。体制を再び立て直した二人は同時に相手に向かいダツシユする。途中で妖夢は『生死流転斬』を入れ、攻撃。霊夢も警醒陣を張るが相手の方が速く潜り込んで来た。足元を薙がれたがジャンプで回避するも半霊の発光でダメージを喰らう。空中で体制を持ち直した霊夢は、珠符『明珠暗投』を行う。跳ねる弾によって動きを制限された妖夢は霊夢の着地点に向かうが跳ねた弾に当たり体制を崩し、そこに亜空穴をしたから入れ込まれて浮かび上がったからの昇天脚で追加ダメージ。空中にかち上げられた妖夢は楔形の弾を形成し飛ばして牽制し下がった霊夢の真上から剣を突き刺す。抉られた地面の破片に気をとられたのが致命的だった。霊夢は妖夢からの当身を喰らい吹っ飛んだ。

「はあ……はあ……次で、決めて見せる。」
「望む、ところ……です。」

お互いは激しい戦闘と負傷で息切れをしている。おそらく次の技が決め手だろう。

「そうね、お互いに出せる必殺技を出しましょう。それで決着を。」
「分かりました。そういうのなら受けてたちましよう。」

符を構える。果たして、先に動いたのは霊夢だった。

「神霊『夢想封』

「甘い！こちらの発動の方が速い！断迷剣『迷津慈航斬』！」

刀が巨大化し、霊夢を襲う。そして勝敗は決まった。

「印」と見せかけて亜空穴！」

一瞬で反対側に回り込み、本命は

「神技『陰陽鬼神球』！！喰らえええっつ！！！」

妖夢は声も出せず背後に出来た巨大な玉に飲み込まれた。

「はあ……はあ……やっと勝てたわ。死ぬかと思ったじゃない。」

「

霊夢は気が抜けたせいであろうか、その場にへたり込んだ。

「まさか一人前になっても倒せないとは……」

慌てて振り返ると刀を持った妖夢がいた。しかし、

「死ぬ間際に本体とのリンクを切り離して良かった。あのまま持つて行かれると流石に辛いからね。」

「え……どうなっているの？体半分は……？」

体半分ほどがもげていた。

「私は正確には魂魄妖夢では無いわ。私は彼女がが想像した『一人前』の魂魄妖夢よ。」

「つまりあなたは亡霊や怨霊かなんかの類なのね。本体に乗り移るタイプの。」

「ご名答。私は結界の外からやってきた。いろいろ教えたいけど、

そろそろ靈力切れね。だから最後に言い残すわ。」

「早く残して浄化しな」

「一つは他にも私と同じ類の怨霊が入って来ているわ。今頃誰かに乗り移ってるかしら。」

「え！それって・・・」

「それともう一つは受けた私のダメージは本体にもフィードバックするのよ。向こうの奥の部屋に二人がいるから治療してね。それともう一個。魂魄妖夢はあの幽玄の姫に認められて欲しかったのよ。もともと姫を守る為に覚えた剣術が、悪霊になったせいで裏として出てしまっただらうね。」

そういつて、彼女は消えて行った。

「起きなさい、妖夢」

「・・・ふにゃ？ここは？確か黒い変な物に取り憑かれていたたたた・・・」

彼女の指した奥の部屋である。そこには確かに妖夢とルナサがいた。ルナサは起きる気配が全く無いので放置。

「かなり痣だらけね。治療用の符は足りるかしら。」

「何で私はいたたたた・・・痣だらけなのいたたたた・・・」

「少しは落ち着きなさい。多分それはあなたが怨霊に力を借りてまでも叶えようとした行為の懲罰よ。」

「あ・・・」

妖夢は全てを思い出した。そしてしばらく考えた後呟いた。

「やっぱり半人前なのかな、私は。」

その表情は暗い。

「そうね、気持ちが一人前だけどやっぱり半人前ね。でもね、一人前に気持ちを持てるのならもう半人前じゃないわ。」

「じゃあどうして最初に半人前と言っただんですか？」

「あなたもともと人間と幽霊のハイブリじゃない。ところで取り憑いた経緯などできれば教えてくれる？」

「ええ。私の憶えてる限りなら。しかし・・・根本的に私は半人前でしたか。なんかなあ・・・」

「半人前でも気持ちと剣術は一人前なんだから元気出しなさい。」

「そうですよね。」

その顔は明るかった。後ろでルナサが起きているのは誰も気づかなかった。

白玉楼終結（後書き）

こんにちは。だん・・・霊刀村雨丸です。いきなりですが改名しました。ええ、勿論気分です。

今回は一応バトルメインで緋想天風にしてみました。本当は弾幕バトルにしたかったのですが、私には如何にしてバトルするかちと想像つかんかったのでこうしました。

これで一応白玉楼編は完結です。次は多分妖精編書くと思うから魔理沙がメインだと思われる。追われている魔理沙はどうなるのか期待しててください。あ、やっぱりしないで！プレッシャーがっ！

まあ今回の後書きはここまでです。最後まで読んでくださった方、有難うございました。

白玉楼の裏終結（前書き）

今回の大妖精の符は全部テキストです。信じ込まないで下さい。
後文章が増えます。

白玉楼の裏終結

魔理沙は己の身に迫る危険から、逃げていた。

足をもつれさせながら。

ぬかるんだ土で転びそうになりながら。

湿った空気を掻き分けながら。

無様な醜態を見せてまでも己に身に迫る危険から逃げていた。

とにかく、逃げていた。反撃しようだとか、誰か助けを呼ぼうだとか、そんな余裕すら無い。

今、もはや魔理沙は異変を幾度と無く解決した魔法使いではなく、脅威から逃げる1人の少女でしかなきくなっている。

スカートの端々は泥で汚れ苦無で穴が開き、愛用の帽子も枝に引っかかってズタボロという惨状である。

それでも魔理沙は逃げることしか出来なかった。

「くそお・・・！どうなっているんだ！」

それは今までに体験したことのない未知なる恐怖だったからだ。

「なんなんだよッ・・・！あの妖精は・・・！何なんだよおッ！」

普通魔理沙ぐらいの魔法使いなら妖精はおろかそこらの妖怪なんか遅れを取る事はないはずだった。

しかし、今は力の形勢が逆転している。例えるなら蛙に追い詰めら

れた蛇とでも言うべきか。

「あそこに・・・！あそこに辿り着ければ・・・！」

魔理沙もただ単純に追われているだけでは無い。反撃の一手となる目印を探していたのだろう。奇妙なうねり方をした木に背を付くと辺りを見回した。ありとあらゆる感覚を駆使して敵の情報を探っていた。

流れる空気を。

木々の擦れ合う音を。

楽しそうな声を。

「！」

そして、草むらや蔭の陰から緑色の髪と黒い服が見え

「そこか！喰らえ！恋符『マスタースパーク』！！」

ミニ八卦炉から出た膨大な魔力はレーザーとなり、衝撃波で周りの草はおろか木までへし折って黒の大妖精に向う。本来ならばそんな技を喰らえば妖精は一瞬で蒸発してしまうだろう。その後、なんとも無く復活し、何事も無かったかのようにまた飛び回るだろう。そうなるはずだった。

「な・・・え・・・？おい、嘘・・・だろ・・・？」

大妖精は悠然とレーザーの中を歩いていた。彼女の体は幻影のように揺らいでいる。しかし、ただそれだけだ。彼女は表情一つ変えずにこちらに向ってくる。それは魔理沙の切り札を無効化したことになり、

「ひッ・・・！嫌だ！来るな！来るなああああ！」

完全に心をへし折られた。

魔理沙の命乞いなど聞いてくれるはずも無く大妖精はやってくる。苦無を五本構えて。だが、魔理沙の目の前に来ると、

「あら、もう終わり？詰まらないわ。もつと楽しませてよ。ねえ？」
嫌だ、死にたくない！死にたくない！いやだああああ！」

どこかで地震と轟音が響いた。

「ふう、危うく魔理沙が串刺しになる所だったわ。それは御免被りたいわね。」

「危ないのはこっちの台詞よ？なによ、いきなり人形が飛んできたと思ったら火柱上げて爆発なんかしたりして。もう少して燃える所だった。」

アリスは目の前の異質な大妖精と対峙していた。

実のところ、大妖精は陰から霧で光を屈折させ自分の虚像を作り魔理沙に向わせていたのだ。当然マスタースパークは虚像なんかに効くわけが無く、心がぼつきり折れたところで適当に痛めつけて帰ろうとしていたらしい。

たまたま研究疲れで気分転換に外を飛んでいたアリスは森ででかいレーザーを目にしたので急いで家に帰り人形を沢山持って行って現場に向ったところ、魔理沙が絶対に出さないような悲鳴を上げてそれを楽しんでいる異質な大妖精の虚像とそれを操る本物の異質な大

妖精がいた。本物が分かったところでアリスに迷いは無い。迷い無く、魔操『リターンイナニメトネス』を発動し投げたのだった。魔理沙は突然起こった地震と轟音と極度の緊張で気絶している。

人形と魔導書を持つアリスに向うのは、切断力を持つ超圧縮の黒い霧を構えた大妖精。

「私の親友を傷つけた落とし前は付けて貰うわよ。」
「強くなった大妖精はいつもと一味違うわよ？」

そして両者は激突した。

先手を取ったのはアリスだった。彼女は人形を空中に固定しそのままジャンプ。空中に飛び上がったアリスは人形操創でナイフを振り回す人形を設置。時間差で空中の人形が楔形の弾を発射する時間差攻撃だ。大妖精だって何もしない訳が無い。前方に霧を作り楔形の弾を相殺しつつバックステップ。人形操創をよけたところでジャンプし超圧縮の霧で相手に斬りかかる。

先読みしていたアリスは小さな槍を持った人形を目の前に打ち出すが、大妖精の出した霧に足を取られバランスが崩壊。一部の人形が楯になってくれたものの、斬撃を受け吹き飛んだ。

「誤算だわ。あの霧停滞性だなんて。あと結構痛い。」

「だから言ったじゃない。甘く見てると死ぬわよって。」

「いや死ぬとは言ってないわ。」

「別に良いじゃない。そんなこと。」

体制を立て直したアリスはダッシュで霧を抜け、相手の目の前に人形を設置。間髪無く設置された人形は楔弾を出す。打撃技が来ると

思いカウンター狙いだっただ妖精はダメージを受け二、三秒隙が発生。それに付け込んだアリスは人形置操で打撃。その最中にレーザーを発射する設置型人形を設置し人形無操で追撃しつつその場を離脱。その後、カードを一枚発動した。大妖精にはそのカードは何のカードか見えていない。

人形無操による爆撃を喰らった大妖精は空中で体制を元に戻し、圧縮した霧弾を発射。牽制のためだ。カードを使っていたアリスにはカードを発動されたものの牽制弾がヒットし、思わずよろめく。使っていたカードが何なのかは分からないが多分、魔符『アーティフルサクリフェイス』だろう。逆に隙を作られたアリスは急いで体制を立て直すも、相手の力を溜めてからの長霧斬撃はガードブレイクがあるらしく、

「く・・・ッ！」

「甘いわあああ！」

相手の霧をまとったタツクルに吹き飛ばされた。

二人は一旦距離を取って身構えながら、

「（まずい、そろそろ人形のストックも無いし体力的に限界が近いわ。ありえないわねあの攻撃力の高さ。次で決めたいわね。）」

「（まだあの連撃が身に響いているわね。本体もただじゃ済んでない。体力もそろそろ底につきそうだから多分次が決め手ね。）」

と思い始める。決心したアリスが、

「どうかしらこんな決闘勝負は？あなたが全力で突っ込み、私が全力で防御する。私の人形を越せたらあなたの勝ち。私が人形で止め

たら私の勝ち」

「奇遇ね。私も同じことを考えていたわ。でも、ただの決闘じゃ詰まらないから、スペルカードで行きましょう。私、今なら突進系の技が出せるわ。」

「分かったわ。それでいきましょう。合図はこの石を投げるから地面に付いた瞬間ね。」

内心、二人は腹を括っていた。馬鹿正直なことに本当に決闘をするらしい。

そして、お互いに一枚の符を取り出す。アリスが石を投げた。

この瞬間、全てはスローに見えていただろう。石が地面に付き、音が空間を伝わり、お互いの耳に入り、脳が『音』として認識した時、

「呪詛『蓬莱人形』!!」

「竜霧『ドラゴニングダイブ』!!」

全身に竜をまとった大妖精は相手の人形計6体から放たれるレーザーを喰らいながらも突っ込んでいった。大妖精は己の身が滅んでいくことを感じながら突っ込んでいく。近づくにつれてレーザーの出力が上がっていくがそんなの気にしない。相手の人形の根本まで来た。そして・・・

アリスは前方に6体の人形からレーザーを放っていた。それでも相手は近づいてくる。途中で出力を増加してもやってくる。そのことに恐怖を感じるが、引くわけにはいかない。果たして、相手はすぐ側まで黒い霧をまとい突っ込んできた。そして・・・

全てが止まった。

手を伸ばした大妖精。人形のエネルギー切れを起こし、全てを無くしたアリス。勝敗は、

「どうやら、ギリギリだけど・・・」

「私の負けね。手が届いてないもの。」

大妖精の伸ばした手はわずかに届いてなかった。アリスは防衛しきつたのだ。

そして、二人はその場にへたり込んだ。

「まさかあそこまで侵食されるとは。」

「もうちよつとだったんだけどなあ。とまあ、私の負けは負け。勝利者には景品を上げなきゃね。景品は、私に関する情報。」

「もう何も聞きたくないわ。」

「まあまあ良いじゃない。どうせもう本体とは切り離してあるから今頃氷の妖精や冬の妖精は元気に飛び回ってるし、私の身もすぐに消えるわ。」

「え？消えるって・・・」

「私は正確に言うとお大妖精ではない。本物の大妖精の願望を反映した『偽者』の大妖精よ。私の本体は怨霊。彼女は、多分強くなって妖精以外のみんなと弾幕ごっこや他の遊びでもしたかったのでしょう。最近、彼女宴会に呼ばれなくてがっかりしていたもの。」

「あー・・・確かに呼んでいなかったね。影が薄いもんだから。」

「もうちよつと気にかけていれば、こんな『隙』は生まれなかった。今度からはちゃんと気にかけてあげてね？」

「ええ。分かったわ。今度あの巫女が宴会やる時はちゃんと呼びましょう。」

「あと、私みたいに取り憑かれた人は他にもいるわ。気をつけてね？つと、もう限界だわ。またいつかお会いしましょう。」

「正直もう懲り懲りだわ。」

そして、『偽者』の大妖精は微笑んで消えていった。

その後、魔理沙を自宅で寝かした。服と帽子はかなり泥だらけなので洗濯をし、必要箇所は縫った。元々裁縫は得意である。その後アリスはとある巫女のもとへ行った。彼女に一部を話すと、

「もう知ってるわ。私も1人撃退したわよ怨霊。そいつから仲間がいることは聞いたけどまさか大妖精に取り付いていたとは。」

「ところで宴会開いてくれないかしら」

「駄目よ。この異変が解決したら。」

と言われた。

宴会の要請を断られたアリスは湖に行き、大妖精の看護に当たった。大妖精は自分が何かに取り憑かれたのは記憶にあるがそれ以降はないです、と話していた。

アリスは全てを話し謝罪した。自分たちがあなたの気持ちに気づけなかったこと。そして、あなたを傷つけてしまったことを。すると、

「そんなこと謝らなくて良いですよ。むしろこちらが謝りたいぐらいです。」

後、一つ約束してくれませんか？」

「どんなこと？」

「もし傷が完治したら、えっと・・・その・・・一緒に、遊んでくれませんか？」

「もちろん良いわよ。その時には弾幕ごっこでもかくれんぼでもしましょう。」

「はい！」

その顔は笑顔にあふれていた。

白玉楼の裏終結（後書き）

こんにちは。 霊刀村雨丸です。

今回も緋想天風にしたかったけど大妖精をどうしようかと考えやっ
と書けました。

後、ぶつちやけ風邪ひいていたので若干投稿が遅れ気味です。 どう
もスイマセン。

この後魔理沙は精神的ショックでしばらく出ません。 代わりに優曇
華ともう1キャラが頑張ります。 期待しといてね。

前回投稿した後に投稿したところ、友人や感想辺りから「もうちょ
っと改行すべき」と指摘されたんでその通りに一応したつもりです。
これで少しは見やすくなったかねえ。

とまあ、これで白玉楼の裏で（魔法の森）編は終わりです。 もし暇
があつたら後日談とか書きたいなあ。 でもそれ以前に次のネタが・

・
改めまして、駄目なところを指摘してくれた友人やわざわざ感想を
送ってくれた方、そしてここまで読んで下さった方へ、どうも有難
う御座いました。 ではまた次回の話で。

狂気の竹林（前書き）

はい、今回は迷いの竹林あたりです。慧音、特にワーハクタク信仰の方はごめんなさい

初めの方はなんかふざけた感がありますのでどうか生暖かい目で見守ってください。

狂気の竹林

幻想郷の一角、永遠亭。かつて、幻想郷から『本物』の満月を奪った月の兎や賢者たちの住む屋敷。その周りには鬱蒼と竹林が生えており、月の兎かよつぽど幸運な人たちしか永遠亭にたどり着けないようになってる。

さらに、永遠亭に住む月の姫、蓬莱山輝夜の能力『永遠と須臾を操る程度の能力』によって『何も無く平和な生活』が永遠に続くはずだった。

「お師匠様！お師匠様！！」

「あら鈴仙じゃない。どうしたのそんなに焦って？」

「大変です！話が長いのでざっくり説明すると飛んで歌ったらのた打ち回って羽衣に包まれてるそうです！！」

「まず『誰が』のた打ち回って保護されたかを入れなさい。話は大体分かったから龍宮の使いを呼んできて。」

「いえ、その必要はありません。龍宮の使い、『永江衣玖』ここに見参しました。兎も保護しております。」

今は狂気に満ちる満月が輝く夜中の1時。永琳は、永遠亭に住んでいる兎が永遠亭に帰宅していたら歌に誘われて誘導されてしまい、

その時に何者かが奇襲をかけたという事として解釈する。

永江衣玖曰く、上の緋想天では統領様が暇つぶしに萃香と遊んでいたので面倒を見る必要が無かったからあてもなくフラフラと夜空を漂っていたら兎の悲鳴が聞こえたので見に行つたところ重症だったので保護したという。優曇華から聞いただけじゃざっくり過ぎたので一部分からないとところがあつたので一応龍宮の使いに聞いたところこんな内容だつた。飛んで歌つたは別物として解釈するのだ。話が分かつた永琳は、

「鈴仙、ちよつと仕返しに行つてきなさい。早急によ！」

「仕返しには行くつもりでしたがどうして『早急』に？」

「ええ、どうやら襲われた兎は寄生虫にやられているわ。それにまだ見たところ脳内が歌の影響で混乱している。そのうち発狂しかねないのよ。」

「私からも頼むよ。同胞の為にも仕返ししてやら無いと気がすまない。だけど私は他の兎達を避難させるので手一杯だ。だから鈴仙、やってくれないか？」

永遠亭に住み着く兎達のリーダー、幸運の素兎の因幡てみにも頼まれた鈴仙の答えは当然

「分かっているわよ。この狂気の赤眼、鈴仙・優曇華院・イナバが仇を取つて来るわ。」

決まっていた。が、

「少々、よろしいですか？」

永江衣玖がふと疑問の声を挙げる。いい感じに永遠亭メンバーが団結していた時にわざわざ疑問を挙げる。空気を読むこともしないで挟んだ疑問の内容は

「何？今いい感じに団結してるのよ。あなた空気読めるんだから配慮しなさい。」

「いえ、いい感じに団結しておられたので介入してはいけない事は分かっていたのですが。ええ、私の見間違いじゃなければ少ししか見えませんでしたけど・・・」

「何よ、早く言いなさい。」

「ええ、襲ったその方たちは、何故かとても黒く・・・いや、『闇』の色をまとってました。」

「・・・え？」

「いや、やはり勘違いかも知れません。あまり視力には自信が無いもので。今は忘れていただいて結構です。ところで、月の姫様はどちらに？」

と途中で話題を変えた。その質問に答えたのは八意永琳だ。

「ちょっと用事妹紅を殴りにがあつて外出中よ。輝夜に何か用？」

「一度も見かけたことが無かったのでせめてご挨拶しようかと思ひまして。」

「そういえばお師匠様、その藤原妹紅さんを『殺し』に行ってから結構な時間が経ってませんか？」

「そういえばそうですね、もう『殺し』に行ってから三時間が経っているわ。流石に心配ね。」

「それなら、私も同行しましょう。一応事件に関わった人ですし、その姫を探すのなら一人より二人で行ったほうが得策です。」

「確かにそうですね。鈴仙、同行させてあげて。」

「分かりました。そうと決まれば早めに出ましよう。ちょっと支度するからまって！」

そして鈴仙が別室に消える。そしてふと衣玖がポツリと、

「……………『殺す』?」

蓬萊山輝夜はまどろみの中にいた。良くある起きるか起きないかの狭間にいる状態だ。なぜ自分が寝ているかは分からない。輝夜は記憶を探った。出てきた記憶にあるのはさっきまで妹紅と弾幕勝負していて、それでももう少しで勝負が決まりそうで、どっちがどっちかは覚えていないけど、そしたら何か後ろからやってきてそれで……

「……………ッ!?!?」

輝夜の意識は覚醒した。そうだ、私は何者かから後ろから打撃され、そいつと戦闘したが途中で体力の限界で気絶したのだった。しかし誰だかは思い出せない。きつと妹紅だ、と輝夜は目処をつける。その後は多分勢い余って妹紅のスペルできつとダメージを喰らったのだらう。体の各所が痛い。くそ、後で妹紅をシメなければと決め込む輝夜。改めて周りを見回すと、

「……………ここはどこ？……………何で布団かぶっているの？」

そこはどこかの家の一室だった。ちよつと大き目の障子で区切られた部屋に自分はある。満月の月明かりがちよつと明るい。今着ている物はいつもの和服ではなく簡素な作りの浴衣みたいな物だ。そして隣には布団がもう一つ。その布団をかぶっているのは

「え……………？妹紅……………？どうして……………？」

同じ浴衣みたいな物を着た傷だらけの藤原妹紅だった。

果たして、妹紅はすぐに起きた。妹紅も記憶があまり無いが自分の現状には驚いてない。流石に隣に宿敵蓬萊山輝夜がいるのには驚いていた。

「なっ！輝夜！どうして……………！痛ッ！」

「そんなの私が知れた……………い……………？」

妹紅が苦痛の叫びを挙げる。妹紅は人間のために作られた蓬萊の薬を服用している為、そこらの負傷や痛みなどすぐ抜けるはずだ。し

かし、いま確かに苦痛の叫びを挙げた。

「妹紅、あんたすぐにそんな傷ぐらい治るんじゃないの?」

「ああ、確かに治っているはずだ。しかし見るからに私もお前も・
」

「ええ、治ってないわ。わけが分からないわ。」

「全くだ。」

妹紅は同意する。そして輝夜から目をそらして上を向き、

「本当は、私は輝夜お前から奇襲を喰らったと思ったんだけどな。どうやら違うようだ。」

「私だって妹紅あんたにやられたかと思ったわ。でも違うわね。どちらかが奇襲したなら傷の量は絶対に私かあんたかどっちかが絶対に多いか少ないはずよ。でも見るからに、」

「どちらもほぼ同じくらい重傷だ。しかも回復しないと来た。行き着いたのは慧音の隠れ家……!」

自分で喋って今更気が付いたらしい。妹紅は啞然としている。

「え?今なんて?」

「そうか、ここは慧音の隠れ家!なら慧音は何処にッ!」

そして一枚の手紙が妹紅の布団の後ろに置いてあった。宛名は妹紅

と輝夜。差出人はもちろん

「慧音……！」

輝夜は黙っている。心のどこかで妹紅のことを思っている輝夜にとつてワーハクタクの上白沢慧音はどうも好きになれない。人間風に言えば恋敵ライバルとも言えなくは無いだろう。そんなことに気づかず、ただ親友とでもしか思っていないなさそうな妹紅は手紙を読む。書かれている内容は

「待っている。お前達の仇は必ず取ってくる。く慧音。」

満月の夜、ワーハクタクは人間から白沢化する。歴史を一晚で編纂する妖力にふさわしく力は格段に強い。本来、白沢化したらそんなやそこらの妖怪なら歯すら立たないはずだった。だが上白沢慧音は、

「かつ……！ゴホツ……！」

見るまでも無くボロボロで地面に倒れ、更には吐血までしている。

「ぐつ、何なんだ……私の……『歴史編纂』が……ほぼ……通用し、ない……！」

何とか異形の妖怪二体は撃退し、更に彼らの『歴史』に干渉して何とか打撃を与えられるまで持ってきた。相手は自身が変わったことに戸惑い、一旦退却したのだろう。しかし、自身の能力の過剰使用と相手からの身体ダメージでこちらも体力の限界だった。

「何とか・・・襲われた・・・妹紅と・・・輝夜だったか・・・
助けだしたか・・・ら・・・良い・・・方だ・・・」

彼女は震える身で言葉を紡ぐ。

「もう・・・だめだな・・・体が、動かん・・・」

そして、一つの願いを言う。

「願わくば・・・彼女達の・・・『恋』が・・・実ることを
・・・」

その時、薄れる視界で確かに、確かに二人の影を確認した。影を見
た慧音は、

「ああ・・・」

地面から再び起きることは無い。

狂気の竹林（後書き）

こんにちは。咲夜信仰の霊刀村雨丸です。無事に五話目かな？を出せました。

今回は永遠亭あたりでおおはしゃぎです。でも登場キャラに永遠亭メンバーでない者が1人・・・

この話は少しずつ書いていったので意外と長く書けました。いつもだったら、「やべ！日曜日だ！」みたいな感じで焦って書いてたので二千ページぐらいで終わっていたんだけどね・・・え？前回とあまりページ数変わってない？まあ、私が言いたかったのはいつもは無計画だけど今回は計画して書いたってこと。偉い俺！

一応、この戦いの話で、まあ俺が付けた区切りでは前編終了です。あ、ちゃんと続くからね！だからなんかもういいやって思う人はこの話が完結したら読むのやめていただいても大丈夫かも。一話目と魔理沙の出発シーンを気にしなければ。

今まで読んでくださっている方がいるので私も書くことが出来ます！言い換えれば読者は作者のパワー源です。だから改めて、読者の皆さん、ここまで読んでいただき有難うございました。

・・・なんか最終話っぽくなっちゃったなあ。二度目だけど続くからね？

狂気の竹林・中編

ここは竹林の中。鈴仙・優曇華院・イナバと永江衣玖が搜索兼復讐で動き出して10分が経過した。

「？、衣玖さん、止まって。」

「え？何でしょうか？」

「何かがいるわ。ちょっと距離があって確認がしにくいけど向こうのちよっと開けた所に。」

「一応確認しといたほうが良いかもしれません。向ってみましょう！」

「ええ！」

鈴仙は地面なんかを歩いたりしない。持ち前の運動神経と視力で竹や竹に生えているわずかな枝とも言えない物を蹴って空中間を移動するのだ。その方が移動が速いし万が一因幡てゐの掘った落とし穴にはまらないようにする為だ。地面に付くのは時々次の竹までの跳躍力が足りなかった時ぐらいである。

かといって永江衣玖だって歩かない。彼女は龍宮の使いであり能力が『空気を読める程度の能力』なので竹林の中の『空気の流れ』を読み、後は龍宮の使いの特技で浮かび上がって流れに乗って移動するだけだ。

彼女曰く、「あまりにも長く浮いて生活していたのでどうやって浮

いているか分かりません。」と鈴仙は聞いた。やっぱり龍宮の使いだからと割り切る。

そんなことを脳の端っこで考えていた鈴仙には『何か』が次第に見えてきた。その正体の状態が分かると、

「ッ!!」

更に速度を上げる。さっき踏んだ枝が折れてしまったがそんなことはどうでも良い。竹林の中で血だらけで倒れている物を見つけたのなら。そして『何か』が判明した。

「まさか・・・」

追いついた衣玖が呟く。そこにいたのは、

「上白沢慧音！」

血だらけでいる気絶したワーハクタク、上白沢慧音だ。

「酷い有様ね。分かったわ、私が治療と手当てをしとく。」

「ありがとうございます！お師匠様！」

ここは再び永遠亭。鈴仙と衣玖は一度上白沢慧音を永遠亭に連れて行き、八意永琳に治療をしてもらうのが賢明と判断し、彼女を連れて来た。帰ってきた優曇華を見た永琳は初め驚いていたものの、衣玖が運んできた彼女を見るなりそう言った。

「しかし歴史編纂となる彼女ですらこうなるとは……悔っていたわ。優曇華、これを持って行きなさい。」

永琳は

「これは何ですか？まるでドーピング薬みたいな……」

「『みたいな』じゃ無くてドーピング薬よ。その名も『国土無双の薬』。それを飲めば一定時間は強くなれるわ。」

「へええ、そんなの作ってたんですか？」

「もしものために作つといたのよ。でもその薬、飲みすぎると体が『アレ』になるからね。」

「『アレ』って何ですか！」

「『アレ』は『アレ』よ。体に『キノコ』が生え……」

「わーーーーー！今はいいです！聞いた私がいけませんでした！」

「……お二人方、仲が良いのは立派なことですがそろそろ本職に戻らなければ……」

衣玖がもつともな意見を提案する。

「そうね、そろそろ始めないとね。優曇華、『アレ』はともかく本
当に副作用出るから使う時は少しずつにしてね。」

「分かりました。出来るだけ使わないようにします。」

こうして、永琳から怪し過ぎる薬を受け取り治療の承諾を得たので再び竹林に向った。

竹林再突入から十分後、

「む、空気の流れが……」

「え？何だつて？」

「空気の流れに『歪み』があります。おそらくこの近くに『歪み』の『元凶』が居るでしょう。」

「つまり、その『元凶』を倒せばいいのね。」

「そうです。しかし気を付けて下さい。相手がみすみすと出てくるはずがありません。奇襲される可能性もあります。」

「分かっているわ。」

そして優曇華はある作戦を提案する。それは

「そうだ、私がこの辺一带を狂気の波動で相手を炙り出すわ。いたら正確な位置を教えるから貴方の能力で空気に乗って音を立てずに奇襲よ。」

「分かりました。今から私は空気の塊を形成します。優曇華さんは

早速取り掛かってください。」

「了解よ」

そして右足を一步前に出し若干前かがみになって耳を立て腕を胸の前でクロスさせると、

「はあああああああ！」

気合と共に、不可視そして不可聴の波動が発せられる。その瞳には何も映っていない。

「私達を波動で探しているわ」

鳥の翼を持つ長い爪を持った少女が言う。おそらく爪は鉤爪、見た目は雀なので夜雀の妖怪だろう。しかしその色は夜より暗い、言うなれば『闇』の色をまとうている。月光のおかげで何とか判断が付く。

「そんなもん僕たちには分かっちゃうけどね」

頭に角らしき物を生やしたマントの少女が言う。彼女の頭にあるのはおそらく触角、マントは『羽』を意味しているので蛍の妖怪だろう。こちらは良く見ないと性別が分かりにくい。そして夜雀の少女と同じ、『闇』の色のマントを着ている。

「ここは相手に奇襲を取らせてこっちに来た瞬間に私達が先攻を掛けましょう。」

夜雀の少女が言う。

「いいね。そうしよう。」

蛍の少女が相槌を打つ。そして二人が言う。

「満月を、楽しみましょう。」

狂気の満月が輝く竹林の中、優曇華小声で

「だんだんと近づいているわ。まだ気付かれていないみたい。」

「ええ、こちらの空気も順調です。『歪み』が大きくなっています。」

衣玖が相槌を入れる。その後も

「さっさと殴って帰りましょう。もうこんな遅い時間だし」

「そうですね、血だらけの妖怪や兔の事も心配ですしね。」

「あれ……？比那名居の娘の事は……」

「ああ、そういえば統領様の事を忘れていました。私とした事が迂闊。今頃どうしているのでしょうか？」

「血も涙も無いわね。」

「そう言わずに警戒を。もう近いのでしょうか?」

「そうですね、すぐそこよ。」

と途中からどうでも良くなった会話に終止符を打って再び警戒する。そして行き着いたのは、

「きつとのあのちょっと大き目の木の辺りにいるわ。」

ちよつと大きな木だ。そして衣玖が作戦を立てる。

「今から私が1000数えたら雷を打ち込みます。貴方は1000数えつつ反対側に回り込んで1000たったら範囲攻撃して下さい。」

「分かったわ。とりあえず精神波ミサイルを撃ち込むわ。」

「大詰めです!」

二人は別れ、優曇華は反対側に回り込みに言ったようだ。しばらく見送っていた衣玖がちよつと大きな木を見つめたまま

「……出て来なさい、異形の妖怪。私の背後に居るのは分かっています。これで良いのでしょうか?」

優曇華には聞こえ無い程度に言う。そしてしばらくして、

「うふふ、良く分かってるじゃない。」

声が出た後にやっと振り返った衣玖が見たものは

「夜雀が私のお相手ですか。『空』を司る者同士が出会うのは偶然ですかね？」

「きつと偶然よ。たまたま私が左が良いと思ってリグルに蟲で私達の形を作り波動を回避して回り込んだら貴方だったから。」

「そんなもんですか。さて、そろそろ・・・」

「始めましょう。」

今から、

「改めて名乗りましょう。私は永江衣玖。空の遙か上の雷雲に住む龍宮の使い。能力はもうお分かりでしょう。『空気を読める程度の能力』です。」

「私はミステリア・ローレイ。人を狂わす夜雀よ。能力は知っただけの通り『歌で人を狂わす程度の能力』よ。でも、今の私なら妖怪までも狂わせられるわ。」

『空』を司る二人が、

「さて、自己紹介も終わりましたし・・・」

「始めましょうか。」

戦いを始める。

「倒してみましよう、夜雀の妖怪!!!」

「狂うが良い、龍宮の使い!!」

「知っていたのねあの人は。気が利くのか利かないのか……」

「いや利いてるでしょ。タイマンで挑んだほうが多分勝機があると判断したと思うし、僕達も単体戦で行きたかったしねー」

優曇華が回り込んだ先に相手が待ち伏せしていた。なんとなく事情が分かった優曇華が言う。

「そんなの初めから言ってくれば良いのに……」

「まあまあ怒らないでよ。向こうは戦闘始めたみたいだし。」

「そうね、ウダウダ言っても始まらないわ。」

「そう来なくっちゃ。」

二人が名乗る。

「私は鈴仙・優曇華院・イナバよ。能力は『狂気を操る程度の能力』。狂気が満ちる望月の夜、この玉兔にかなうと思っ?」

「僕はリグル・ナイトバグ。能力は『蟲を操る程度の能力』だよ。ただの妖怪だと思ってナメてかかると痛い目に合うからね?」

そしてもう一方での戦いが始まる。

「狂気の視線を喰らいなさい、蜚の妖怪！」

「喰らい尽くされな、月の鬼！」

狂気の竹林・中編（後書き）

こんにちは、靈刀村雨丸です。あれ？字が違う？まあ良い。後で名前変えるから。あ、読み方は「れいとうむらさめまる」で合ってるからね？

今回6話目を出させてもらいました。いんやもう体育祭やら何やらで死にそう。でも俺は日曜日前後に投稿する。それが俺の『正義』！

上がダダすべりなのはその辺に置いて、今回は優曇華・衣玖チームVSリグル・ミステイアチームです。永江衣玖だけハブられている。だって衣玖ちゃん以外全員永夜抄初登場だし。

なんか25日の月曜日に俺の家に確かペンネームで「シャーペン芯ケース」さんがやって来るそうです。緋想天でボコボコにしてやる！

とまあ、冗談はともかく、リアルに来ます。楽しみだなあ。

こんなふざけた後書きまで読んで下さった方へ、本当にどうもありがとうございました。今回はこの辺で。ではまたさらば！

……最近活動報告書いてねえな。明日は書こう。

狂気の竹林・後編A（前書き）

今回は永江衣玖パターンと鈴仙・優曇華院・イナバパターンがあります。今回は永江衣玖パターンです。

最後が結構きつめの下ネタなので下ネタが嫌いな方、特に女性の方は読むことを止めたほうが良いかも知れません。と言うより、物好きじゃなければ止めるべきだね。

狂気の竹林・後編 A

永江衣玖は前に移動しながら戦闘情報を解析する。自分の武器は伸び縮みする『天の羽衣』。対する相手はどうやら手から生えている長く鋭い『鉤爪』のようだ。故に、

「射撃で距離を調整し、羽衣のリーチを使って攻撃しましょう。」

戦法を立てた永江衣玖は手から扇状に広がる雷光球を出す。とりあえず牽制のためだ。相手は霊力を使ってこのまま突っ込んできた。『隙』と判断した彼女は

「喰らいなさい、魚符『龍魚ドリル』！」

手に羽衣をドリル状に巻きつけ電流を流し回転させる。本物のドリルと化した腕は寸分の狂い無く相手にえぐり込み、そして、

「くっ……！」

ミステリアはダッシュ中に翼の角度を変えて踏み出す。角度を持った翼に風が当たると必然的に揚力が発生し、その結果龍魚の一撃をかする感じで切り抜けた彼女はすれ違いざまに鉤爪で斬撃。永江衣玖は左腕で防御はしたものの風圧でバランスを崩す。その結果、

「鳥符『雀返し』！」

燕返しならぬ『雀返し』を喰らって永江衣玖は吹き飛んだ。地面から立ち上がった彼女は

「読みが甘かったようです。次はそうとは行きません。」

と自分を叱咤し喝を入れる。珍しく気合十分な彼女は空中に飛び地面に向って反射する電気弾を撃つ。この電気弾は弾道がある程度残る為当てると追加ダメージで少し硬直してしまう。

反射することを見抜いておらず、鳥型の弾を溜めて出そうとしていたミスティアに直撃すると案の定、相手は一瞬空中にとどまる。そのわずかな隙を見逃さなかった永江衣玖はミスティアの斜め上から、

「隙あり。」

の声と共に羽衣を下に射出。軌道上にいたミスティアは下に打ち付けられる。勢いで地面から跳ねた彼女は体勢も立て直せないまま既に地面に着地している永江衣玖から貫手を喰らう。貫手は何とか身を捻って回避できたものの、伸びた羽衣で再び地面に打ち付けられ、跳ねた所にコンボフィニッシュで電球弾を決められ吹き飛んだ。

「やってくれるじゃない。」

立ち上がったミスティアは言う。先ほどの連撃で傷が目立つが体力と持ち前の回避能力で衝撃はある程度逃がしたようだ。しかし確実にダメージが残っている。

今、二人の距離は約3間^{5メートル半}。果たして、先に動き出したのは永江衣玖だった。

ミスティアは相手が先に動いてきたことに少し驚愕し、そして密か

に笑った。わざわざ相手から突っ込んで来るとはいい度胸。反射神経ならこちらの方が上。ならば相手がダッシュからの攻撃に移る瞬間を見切って崩せば良い。

そう考え、しかし相手の特性からによる間違いに気づいた彼女は新たに作戦を立てた。しかし、これは一か八かの賭けである。

「やってみる価値はありそうね。後は体力が持つかどうかかな？」

そして相手に突っ込んで行く。その作戦は・・・

永江衣玖は自分から突っ込んでいけば必然的にガードをするか自分が攻撃を出す瞬間を見切って攻撃技を出してくるだろうと目処をつける。ならばこちらはガードからの反撃技を繰り出せばよい。ダッシュから繰り出すのはいささか高度なテクニックだがそんな事をし無ければならない敵だ。故に、

「不意を突きましょう。」

永江衣玖は自分にはそぐわない行動をとる。果たしてその結果は・・・

永遠亭の中、『月の頭脳』こと八意永琳が、

「あら、地震かしら？ちょっと揺れなかった？」

答えたのは

「震度にして1〜2位だろうね。しかも局地的と来た。両方とも生きていると良いんだけど・・・」

『幸運の素兎』こと因幡てゐだ。お手伝い中に揺れを感じた二人が足を止めて話している。何かが墜落でもしたのだろうか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『羽衣は水の如く』。それは雷雲の中に存在する『水』を利用した技。薄く、しかし絶対的な壁を水で作り相手の攻撃を弾き反撃として水を帯状に変え相手を打撃する。相手の不意を突くのはとても有効である。

永江衣玖はこれを使い反撃をしようとしていた。事実、それは叶った。しかし相手の戦法は読めておらず、結果重度の反撃を喰らった。その戦法は、『捨て身』。

ミステリアの戦法は一言で言うと『捨て身』。相手の反撃技をわざと喰らい吹き飛ばされた勢いで近くの木に飛び移り幹を蹴って相手に一瞬で接近しクローで相手を空中に上げ、そこから貫手で相手を掴み急降下してその勢いで地面に叩き付けるといって一歩間違えれば自爆しかねない荒技だ。

ミスティアは賭けに出た。そして成功した。しかし成功していない。そう、相手の最後の抵抗で自分も地面に激突したのだ。

今、永江衣玖とミスティアは地面に倒れている。二人とも地面に激突した為体力は底を尽きて限界を突破しているだろう。しかし、かなりフラフラになりながらも立ち上がった者がいる。

「私も……甘かった……」

「……」

立ち上がったのはミスティア・ローレライ。永江衣玖は立ち上がるうとするも四つん這い以上動くことが出来ない。しかし、

「私の……負け……ね……もう……体が……消えかけ……て……」

「……!」

永江衣玖が顔を上げる。目に映るは薄れていく夜雀の妖怪。目測だと後数分もしないうちに消えてしまっただろう。体が消えていく中、ミスティアが

「私は……強力な……方……だけど……まさか……
ね……」

「……足が……!」

かすかに声が漏れた。もう足が無くなっている。

「詳しい……ことは……博麗の……巫女に……聞いて……他に……もう……二人……いるわ……」

既に胴体も無い。最後に言う言葉は掠れていたが、だがはっきりと永江衣玖の耳には聞こえた。

「……ま……の……や……か……」

もうそこに夜雀の妖怪は居ない。

「凄い効き目です。もう全身が動けるくらいになりました。流石は『月の頭脳』、月出身も伊達じゃ無いですね。」

今永江衣玖は八意永琳から貰った回復型特効薬を服用している。恐ろしいほどの効き目だ。本人はこの薬は副作用は無いと言っていたが心配になるくらいである。

「あら、終わっていたのね。ボロボロじゃない。何てこずってんの？」

「私より時間喰ってる兎が何言ってるんですか。」

そして目の前に優曇華がやって来た。永江衣玖は立ち上がる。見たところ彼女も衣服が所々破れているが自分ほどでは無い。

「ありえない強さだったわ。普通あんな妖怪如きにあんな力は無い。」

しかも最後消えていくってどうなってんの？」

「私が聞きたいくらいです。ですがどうやら博麗の巫女がご存知のようです。」

「そんなこと言っていたわね。他になんか聞いてないの？」

永江衣玖は記憶を探る。たしか掠れた声で、

「何でしょうか？こつまとか何とか・・・あ」

「向こうもそんな事を言っていたわ。そして多分思っていることは同じ。」

二人は頷き、口をそろえて

「『こうまのやかた紅魔の館、』こうまかん『紅魔館』ね」

二人はどちらとも無く溜息をつき優曇華が、

「聞きに行く必要がありそうね。」

「同感です。」

そしてふと永江衣玖が若干ニヤつきながら

「あの、優曇華さん？そのスカートの前辺りが妙に盛り上がっているのですが・・・」

「・・・」

優曇華は自分の下半身を見る。確かに妙に盛り上がっている。

「~~~~~!」

「どうやらあの薬を服用したのですね。使ったら案の定『キノコ』
が生えて目の前に偶然にも衣服がボロボロでかなり際どい格好をし
た女性が目の前に居るから思わず反応してしまったと。」

「えつと……そんなことは……」

永江衣玖が直球で追い討ちをかける。相手が戸惑っているのはあな
がち間違いじゃ無いのだろう。

「あらあら？どうやら凶星のようですね？まあしかし今回は足手ま
といになってしまいましたのでお詫びに処理でも手伝いしましょう。」

「……へ？」

永江衣玖の思考に優曇華は追いついてないようだ。優曇華がまた戸
惑っている隙に瞬間的な速度で後ろに回りこみ、羽衣で手を束縛し
た上で膝裏を押して膝立ちにさせる。

もちろん足手まとい云々は出任せ(?)で単に永江衣玖の統領様の
躰から出来た『隠れスキル』が発動しているのだ。

「ええええええ!？どうなっているの!？」

「遠まわしに言うと、竹林束縛プレイって新鮮ですね。」

「ちょっと!!今すぐに離しなさい!!」

「下は正直ですかね。」

どうやら完全にスイッチが入っているようだ。妙に怖い。恐怖を直感的に感じ取った優曇華は後ろにいる元凶に

「待って、話せば分かる……」

「きっと『キノコ』の『孢子』を全部出せば治りますかね。ふふ……」

「嫌あああああ!!謝りますからやめてええええええ!!」

十分後、

「もう限界だから!」

「いえ、まだまだです。」

二十分後、

「もう……ダメ……」

「いたって元気じゃないですか。」

三十分後、

「ほんと……もう……救して……」

「確かこの辺をこつすると・・・ほら」

「ひぎっ!!--!!」

「まだまだ元気です。」

優曇華がこの後『キノコ』の消滅と引き換えに精根尽き果てたのは言うまでも無い。

狂気の竹林・後編A（後書き）

靈刀村雨丸です。今回は後編を永夜抄みたくA・Bみたくして分けました。

さてなんとなく早めの投稿。何故かと言うと前書きで説明したとおり、早めに投稿して早めにボコス力言われて早めに後悔したかったです。

今回は永江衣玖です。そう、衣玖ちゃんです。彼女はきつと『隠れSスキル』を持っているはず。

だって、天子が『M』って結構有名だよな？そうすると、必然的にそうさせた『S』の方がいるよね？更に、天界近くに住んでいるのって比那名居天子か永江衣玖だけだよな？ならば答えは見切った。永江衣玖だけじゃないか。

なんか本文の最後のほうからひでえ事になりましたが勘弁してください。では、きつと日曜日に投稿するぜ！

狂気の竹林・後編B（前書き）

前回は前回なので今回も下ネタがあります。しかも前回よりもキツいので女性の方は特に注意してください。

今回は鈴仙・優曇華院・イナバパターンです。イナバ！イナバ！

狂気の竹林・後編B

優曇華は狂気の波長を応用した反射する波動で相手の身体能力を調べる。感じたところ、相手は余り接近戦に強く無いらしく、蛍の光を応用した『光術』を主とする射撃戦法だ。他にも色々な『蟲』の力を使うことが出来ると判断する。

「光術は何かかなりそうだけど、問題は『蟲』の力ね。」

「んっふふっ、やろっと思えば『蠍』の力も使えるよ。」

「『蟲』の概念は一带どうなってるのかしら。」

「さあ?」

そんな事を思いつつ精神波弾丸を撃つ。相手もいちいち答えてくれるとは律儀だと思うがそんなことはどうでも良い。牽制で撃つたものは普通にかわされているので今度は精神波ミサイルを一発、立て続けに今度は『マインドエクスポージョン』を撃つ。

『マインドエクスポージョン』は初速こそ遅いものの、威力、そして拡散範囲は優秀である。弾幕の押し合い、接近戦には持って来いである。相手は普通のミサイルは切り抜けたものの『マインドエクスポージョン』との距離の目測誤差で切り抜けられず爆風に巻き込まれる。

爆風と言えど元を正せば精神波。優曇華は自分の波長を変えて爆風を回避できるのでそのまま相手の懐に。手に精神波の塊を作り衝撃波として打ち出した。

吹き飛ばされたりリグルは途中体勢を立て直して光球を発射する。光球はフラフラしながらもちよつと速い速度で相手に突っ込むので見切るのが難しく、更にはたとえ切り抜けたとしても反撃を喰らいやすい弾である。

実際、優曇華が走って回避したがその後設置された残留型弾幕の真ん中に突っ込んでしまい蚊の餌食となる。その直後、相手の渾身の一撃を喰らい吹き飛ばされた。

「・・・あなた、あまり殴り方を知らないのね。思ったよりはダメージが少ない。」

「当たり前じゃん。いつもすぐに出て来ては撃退されてるから結果的に出番が少ないんだから。」

「要するにあまり相手にされないのね。」

「そういうこと。だから今回ぐらいはこの『力』も手に入れてるから頑張りたいなあ・・・」

「え？何？聞こえないわ。」

「あー、うん。別に支障は無いから大丈夫。今回ぐらいは勝ちたいだけ。」

「滅茶苦茶支障あるんですけど。」

そう言いつつカードを一枚発動する。

それは『デイスオーダーアイ』。自分の波長をずらして実体のある『影』を左右に飛ばして攻撃する。このとき自分は相違空間上に波長を変換している為一時的に存在しなくなる。『影』が再び集まった時に自分は波長変換が切れるが余波が残っている為結果的に言う
と出現時にも攻撃になる使い勝手のいい技だ。

優曇華は相手に突っ込みながら途中で先ほど発動した『デイスオーダーアイ』を使用。カウンターを取ろうとしたリグルは案の定攻撃を外してしまい幻影の突撃でダメージを受ける。空中で体勢を立て直すも致命的に高度が低く、既に実体化していたため、

「喰らいなさい！弱心ダイモチウエイション『喪心喪意』！」

「ぐあ……ッ！」

衝撃波による空間破壊を喰らいまたしても吹き飛ぶ。

リグルは吹き飛ぶ中自分の使えるスペルカードを確認する。使えそうなのは蛍符『地上の流星』、『光幻影』、そして蠍符『気絶毒蟲の長針』。これだけあれば逆転できると考える。新たに作戦を立てたりリグルは動き出す。まさに獲物を狙うように、獐猛に。

優曇華はリグルが一枚のカードを使ってくるのを見た。とつさに身構えるが何も起きない為技の切り替えだと判断する。しかし油断は禁物だ。そう心に誓いながら適当に弾丸とミサイルを撃った後に相手に突っ込んで行く。

リグルが射撃を切り抜けるのに手間取っている間に精神塊で攻撃して蹴りに繋げようとする戦法だ。しかし、このとき優曇華は知らなかった。相手の切り替えたカードが対打撃カウンターだということ。

「甘いわあ！これでも喰らいなさい！」

優曇華が拳銃の形にした手の指先に精神塊が出来る。弾丸を切り抜けるために走っていたリグルは驚愕していた、口元以外は。

「え？」

しかしもう遅い。走った勢いをすぐに止められるはずも無く相手に精神塊を叩き付けてしまった。その直後、

「『甘い』はこっちの台詞だね！」

叩き付けたリグルが閃光を撒き散らす。どうやらこれは打撃を喰らうと反撃として光るダミーのようだ。閃光を防ぐのに一瞬優曇華は無防備になる。この隙をリグルは逃がさなかった。

「続けて、蛍符『地上の流星』！」

リグルの手から打ち出されたやや大きめの光る青い弾の直撃をうけ吹き飛ばす優曇華。しかしまだ連撃は終わらない。木の幹を蹴って立て直した優曇華に間髪いれずリグルがコンボを決める。

「喰らえ、蠍符『気絶毒蟲の長針』！」

光の長大な『針』が優曇華を貫いた。

毒針を喰らって意識が朦朧とする中、優曇華は自分の死を覚悟していた。もうじき蠍の毒が全身に回って死に至るだろう。優曇華は諦めていた。お師匠様やてゐには申し訳ないが、これは自分が未熟だったせいだ。ああ、もう足が少ししか言うことを聞いてくれない。そのうち腕も駄目になって全身が動けないまま野垂れ死にするだろう。全てを受け入れようと目を瞑ろうとしたその瞬間、

ドオオオオオオン

地震がした。まだ感覚がかすかに残る中、小さく、しかしはつきりと優曇華には感じ取れた。この手の地震は何かが墜落したタイプと似ている。今、この辺りで戦闘しているのは永江衣玖と夜雀の妖怪だ。多分この二人が原因だろう。そのことを確認し、今、向こうは諦めずに戦闘をしている事を確認すると、

「……………ッ！」

優曇華の意識は覚醒した。

リグルは見た。相手が蠍の毒を喰らったにもかかわらず立ち上がった事を。リグルは思う。相手はとても怖いと、同時にとても面白いと。

「面白いじゃない！決めようか、最後の一撃を！」

拳を固め、翅を羽ばたかせて構えを取る。一撃で決めるようだ。

「こんなところで……負けて……いる訳には、行かない！」

そう、臨時で共同で行動している永江衣玖が天から逆さまに落とされていても抵抗しているのだ。向こうはまだ勝負を捨てていない。自分が諦めてどうするのだ。そう思い、そして懐から一つのびんを取り出す。そこにあるラベルには生薬『国土無双の薬』の名。

「負けるわけには、行かないものね。」

びんの蓋を開け、一気に飲み干す。中身は薄緑色で向こう側が見える程度に透けている。

「はああああああ！」

身体にエネルギーが漲る。しかも毒や傷まで高速に治りだした。こ

の生薬『国土無双の薬』は永琳が副作用覚悟で強化したのだ。本当に緊急の時の為である。そして優曇華が一つの構えを取る。それは拳を固める動作。一撃に賭けるつもりだ。

お互いが動き出したのは同時、二人とも相手に向ってひたすら突っ込んで行く。残り距離が5メートルを切った。4メートル、3メートル、2メートル、1メートル、そして……

バシイイイイイン！

二人が交差して行き、そのまま動かない。しかし、勝敗はすぐに決まった。リグルが、倒れた。

「あーあ、負けちゃった。とうとう限界来ちゃったか。もう足が消えてるし。」

「私に勝つなんてまだ……え？」

優曇華が振り返ると相手の足が消えていくのが見えた。あたかも光に包まれて浄化していくように。

「どっなっているの？」

「質問がアバウトすぎるのと消えるまでの時間がもう無いから答えられないな。だからちよこつと言いつ残しておくよ。よく聞いてね。」

「はあ。」

「まず、僕たちみたいな霊体で行動できるタイプはたぶん消滅したね。残るは憑依型だけ。このタイプは多分二体。かなり強いから気をつけてね?」

「え?ちよつと意味わかんない。」

「このことについてなら博麗の巫女辺りに聞けば分かるかもね。」

「え?え?」

「かなり・・・混乱し・・・て・・・いる・・・ね」

「!」

見るともう既に首まで浄化し始めている。もう一言言えるか言えないかの域だ。

「最後・・・に・・・」

紡がれる言葉は、

「じ・・・う・・・ま・・・か・・・」

最後まで紡ぐことが出来ずに消えて行ってしまった。

「言い残されたことは後で聞くとして、最後に言い残した言葉はやっぱりあそこのことかしら？」

戦闘が終わり、しばらく考えた後後で聞くと結論付いた優曇華は歩みを進めて行く。程なくして、かなり衣服がボロボロである永江衣玖を発見した。

「あら、終わっていたのね。ボロボロじゃない。何てこずってんの？」

「私より時間喰ってる兎が何言ってるんですか。」

何か下がムズムズするがそんなことは今はどうでも良い。とりあえず戦況報告。

「ありえない強さだったわ。普通あんな妖怪如きにあんな力は無い。しかも最後消えていくってどうなってんの？」

帰ってくる返答は予想通り、

「私が聞きたいくらいです。ですがどうやら博麗の巫女がご存知のようです。」

それは既知の事実である。故に

「そんなこと言っていたわね。他になんか聞いてないの？」

聞いてみるとしばらくして答えが返ってきた。

「何でしょうか？こつまとか何とか……あ」

「向こつもそんな事を言っていたわ。そして多分思っていることは同じ。」

二人は頷き、口をそろえて言った。どうやら事実が確定したようだ。

「『紅魔の館』、『紅魔館』ね」

二人はどちらとも無く溜息をつき優曇華が切り出す。

「聞きに行く必要があるそうね。」

「同感です。」

頑張つて気にしないようにしていたが、やっぱり永江衣玖の服が際どい。服の上からでは分からなかったが意外と大きい。うーん、羨ましい。しかも肌が綺麗だ。体も柔らかそう。そう考えているとやっぱり下がムズムズする。そういえばあの薬、副作用があったような……

そんな事を思っている途中、永江衣玖が怪しい笑顔で、

「あの、優曇華さん？そのスカートの前辺りが妙に盛り上がってい

るのですが……」

そう言われたので思考を止めて下を見た。その瞬間薬の副作用を思い出し、

「~~~~~!」

見事に盛り上がっているが『キノコ』の性質上、そう簡単に引っ込みはしない。さらに、

「どうやらあの薬を服用したのですね。使ったら案の定『キノコ』が生えて目の前に偶然にも衣服がボロボロでかなり際どい格好をした女性が目の前に居るから思わず反応してしまったと。」

見事に凶星を指された。

「えっと……そんなことは……」

何とか誤魔化そうとするが、正直頭の中がパニックだ。まさか追い討ちをかけて来るとは誤算。

「あらあら？どうやら凶星のようですね？まあしかし今回は足手まといになってしまいましたのでお詫びに処理でも手伝いましょう。」

言われたことは分かるがパニックってるせいで意味が分からない。処理って何？

「……へ？」

そんな疑問を漏らした瞬間、何故か手が縛られて動かなくなり膝立

ちになっている。そうしてやっと現状が理解出来たので、

「ええええええ！？どうなっているの！？」

「遠まわしに言つと、竹林束縛プレイって新鮮ですね。」

そう返された。今はなんか危険だ。良くは分からないがなんか危険だ。そう感じたので反抗を試みる。

「ちよつと！！今すぐに離しなさい！！」

「下は正直ですかね。」

何か怪しげなオーラがする。妙に怖い。恐怖を直感的に感じ取った優曇華は後ろにいる元凶に譲歩を試みる。

「待つて、話せば分かる……………」

「きつと『キノコ』の『孢子』を全部出せば治りますかね。ふふ……………」

意味が理解出来た。要するに干からびるまで放してくれないそうだ。

「嫌あああああ！！謝りますからやめてええええええええ！！」

十分で意識はボロボロなのに下はヤル気満々だ。これ以上は自分の意識系が持たない。

「もう限界だから！」

「いえ、まだまだです。」

二十分じゃほぼ意識エネルギーが切れているのに下は頑張っている。本格的に絶体絶命だ。

「もう・・・ダメ・・・」

「いたって元気じゃないですか。」

まさか三十分まで意識が持つとは思わなかった。と言うより無理やり意識を持たされていた。そろそろ下も元気が無くなって来ている。そう、今が引き時。しかし声が出ない。

「ほんと・・・もう・・・赦して・・・」

「確かこの辺をこつすると・・・ほら」

未知なる感覚が体を包み込む。それ故『キノコ』が

「ひぎっ！！！！」

「まだまだ元気です。」

優曇華がこの後『キノコ』の消滅と引き換えに精根尽き果てたのは言うまでも無い。

狂気の竹林・後編B（後書き）

霊刀村雨丸です。今回7話目を出すことが出来ました。あれ？8話目だった？だったら今回は7・5話で良いか！

今回は普通に日曜日投稿。前の反応が幸い（？）にもあまり無かったので普通に出させて頂きました。うーん、やっぱり下ネタ駄目だよなあ。

いきなり変なことを言うけどさ、優曇華って『M』じゃね？

いや、前回衣玖ちゃんの『隠れSスキル』論から行くとそうならないかな？

だって、えーりん同人誌とかで結構Sキャラ扱いだよな？そんで結構えーりん特製のお薬優曇華に服用させているよね？なんだかんだで優曇華頑張っちゃってるよね？若干確定事項少ないけどこのことから優曇華は若干Mだろう。

ちなみに俺は東方の中で二番目に好きなのは紅美鈴。そう、めーりんです。特に意味はありませんでした。でも次は紅魔館で大はしゃぎさせます。

実は、今度から活動報告でちょこちょこ自分のお気に入りアレンジ曲を紹介したいと思いますのでよければ聞いてください。ではまたいつかどこかで会いましょう！

ここからは話の補完です。

この後、干からびた優曇華をつれて一回永遠亭へ帰った。復活した上白沢慧音につれられて輝夜たちを救出。妹紅も慧音と一緒に仲良く帰っていった。輝夜が何か言いたそうなのは誰も気づかない。

その後改めて永江衣玖と蓬萊山輝夜が挨拶をして適当に雑談した。優曇華はやっぱり干からびたままである。不思議に思った永琳が衣玖に聞いたところ、

「ねえ、どうして私の優曇華が精気の無い顔してぶっ倒れているの？」

「ええ、少々貴方の作った薬の副作用の処理でいろいろと」

「あら、あれはこの薬を飲むか『キノコ』の『孢子』を全部抜けば治るのに。」

「ちよつと後者の方を選択したもので」

「なるほどね。」

その後、永琳が衣玖を別室に連れて行き二人で対談。

「実はあの薬、悪戯心でかなりの『孢子』が出来るようにしたんだけど。」

「ああ、だからあんなに時間がかかったのですか。どうりでおかし

「いと思ってたんですが。」

「……ぶつちやけ、何分ぐらい?」

「ええ、刻にして二刻から三刻、時間にして30分から40分ぐらいでしょうか?」

「……貴方、何者?あれ普通は一時間や二時間は無いとキツい物よ?」

「そこら辺は秘密です。」

「ちょっとコツ教えてくれない?」

「そうですね、コツといえば……」

永江衣玖が小さく八意永琳に耳打ちをした。聞いた八意永琳は

「……貴方、結構、いやかなり鬼畜ね。」

「女性の『アレ』の方でも出来ますよ。やってみましょうか?」

「この場合、誰が喰らうの?」

「私の目の前にいるじゃないですか。」

「謹んで辞退させてもらおうわ。蓬菜といえど死にそうだから。」

「残念です。」

そして永琳が、

「結論から言うと、最初は『孢子』を溜め込ませて相手が『あーや』うー』しか言わなくなったら良いのね?」

「はい。言葉で責めるとなお良いです。その後は……」

「ええ、大フィーバーさせれば良いのよね。」

「そんな感じですよ。いろんなところを使って大フィーバーさせて下さい。元気が無くなったらアレをいろいろと」

「いろいろね。抜かないほうが良いのかしら?」

「ええ、突っ込みつぱなしで。他にも抜けるか抜けないかの位置でもてあそんだりいろいろと試してください。」

「分かった。参考になったわ。どうもありがとう。」

「ほどほどにしといて下さいね?」

そうして挨拶を済ませた後、雷雲の中に帰っていった。見送っていた永琳がポツリと

「……人は見た目で判断するな、か。まさしくその通りね。あんなに鬼畜だったとは。」

黒魔の紅魔館・集結（前書き）

今回は紅魔館です。これは序章に当たるのかな？

文章が長いので頑張ってください。下ネタはありません。前向きなのはあります。

黒魔の紅魔館・集結

湖の畔に建つ紅き館、紅魔館。今、この紅魔館内部で戦闘が行われている。戦っているのは幼き紅き悪魔、レミリア・スカーレットと完全に瀟洒な従者、十六夜咲夜だ。両者は互角、とは言えなかった。一方的にレミリアがダメージを喰らっている。

両者の間は約7メートル。

「はあっ！」

レミリアは『デーモンロードウォーク』で突撃をする。『デーモンロードウォーク』はレミリア特有の速さを駆使し、相手の視覚を超越する速さで体当たりをぶちかます技だ。

咲夜は『もうすぐ激突』するレミリアに迎撃。体当たりを喰らうであろう限界の場所まで下がりそこから一步下がり跳躍。そのまま着地して後ろに振り返りつつ『マジックスターソード』を投げる。そこには、丁度体当たりから着地に移って完全に隙だらけなレミリアがいた。

「ああああああ！」

レミリアは時間加速による切断打撃力が向上したナイフを喰らい吹き飛んだ。

「どうして……!どうして私の攻撃が……!」

「簡単ですよ。お嬢様の實力じゃまだこの私には触る事すら出来な
いだけです。」

「くっ……!どうしてよ!どうしてそんな風になっちゃった
のよ……!」

咲夜は何も答えない。ただ笑っているだけだ。かつて、忠誠を誓っ
たあの『咲夜』の面影はもう何処にも無い。あの白と青を基調とし
たメイド服は今や黒と赤が基調となり禍々しいオーラを出している。
咲夜はレミリアの質問に答えないまま話を切り出した。

「さて、お遊びの時間は終わりです。良くここまで持ったものです。
いい加減くたばりなさい。」

そう言つて一歩、また一歩と前へ踏み出す。

「嫌!来ないで!」

そう言つて『デモンズダイナーフォーク』による5本の槍を投げる。
しかし前進をしたまま身をわずかに揺らして回避した咲夜は

「黙つて下さい。」

「嫌ああああ!」

中段蹴りがレミリアの胴体に炸裂し、吹っ飛んだ後壁に叩きつけら
れ気を失った。吸血鬼と言えど、その体は十歳前後の体型だ。満足
に衝撃を逃すことも出来ない。

服がナイフで破け、ボロボロであるレミリアを担いで咲夜が別室に連れて行く。その部屋の中央に十字架、部屋の四隅、天井も合わせ八個の隅には杭がついており、杭には銀の鎖が繋がっている。中央の十字架にレミリアを銀鎖で縛りつけ、そこから更に天井の銀鎖を二本ずつそれぞれ左右の腕にくくり付ける。足も同様だ。

古来より、『銀』は悪魔の魔力を弱める効果を持つ。大量の銀鎖で縛られたレミリアは動くことはおろか、魔力すら使えない。

今、レミリアはかつて恐れられていた吸血鬼、スカーレットデビルではなくただ無力の幼い少女となっていた。

縛り付けた後、咲夜は前、つまりレミリアの方向を見た。レミリアの顔はうつむいて見えない。しかし、咲夜の目には感じられた、レミリアの戸惑いが。『どうして私を・・・？』と信頼している人に裏切られたことがあまりにショックだったのだろう。

「・・・・・・・・」

一瞬、咲夜の瞳に揺らぎが出る。しかしそれもつかの間、咲夜は部屋を見渡した後出て行った。

ここは博麗神社。幻想郷との境目に建っておりいつも参拝する人がいない神社である。実際、参拝する『人』はいるのだがほとんどは人でない。妖怪や幽霊に信仰されているのだ。今も境内で湿気た煎

餅を焼いてバリバリ食べている人がいる。この神社の巫女、博麗靈夢だ。

「はあ、まるで前の戦いが嘘のようだね。今日も快晴ね。雲が一個しかない。」

「それは快晴ではなく『晴れ』です。」

そう突っ込むのはかつての敵、魂魄妖夢である。今、白玉楼に紫がお邪魔しているので幽々子はお酒で気分上々、悪く言えば酔っ払っているのである。

妖夢曰く「このままでは幽々子様や紫様に何されるか分かりません。この前なんて……」など悲惨な状況になつたらしいのでこつち神社に逃げてきたのである。事情が分かつた靈夢は紫の『被害者』のよしみで少々預かることにした。

「人形遣いが来た後まさか妖怪の山の天狗がやって来てあんなに聞かれるとは思わなかつたわ。」

「ご愁傷様です。それでどうしたんですか？」

「この情報を新聞にしない事と他にこの情報らしき物を聞いてきた妖怪やらには伝えることを取引条件として伝えたわ。そしたら「分かりました。取り合えず仄めかしてみても相手がそれらしき情報を漏らしてきたら交換条件で取引します。」とか言ってたわね。」

「あう。あの天狗、信用なるんですか？」

「情報関係ならなるわよ。そこら辺なら大丈夫。」

「はあ。」

そして天狗に1つ言い忘れていた情報を思い出す。

「そういえばさ、あんた他にもいるって言うってたわよね?。」

「いえ、その辺は記憶に無いですね。でも『私』のことだから嘘はほとんどつかないはずですよ。」

「ほとんど……まあいいや。うーん、他にもいるっていうのは気になるわね。1体解決したけどね。」

「ええ、どんな感じになっているのか私も見てみたいです。ところで煎餅くれませんか?。」

「湿気てるからその七輪で焼くと美味しいわよ。」

「はあ。」

そこへ1人の来客だ。これもまた妖怪である。

「ああ、こんな所にいましたか。」

「あれ?確か龍宮の……。」

「龍宮の使い、永江衣玖です。今回はちょっと事情聴取でやってきました。」

やって来たのは永江衣玖だ。ちなみにまだ霊夢は永江衣玖の戦闘は

おろか魔理沙の様態すら知らない。アリスはどうやら自分の戦闘のことしか話していなかった。

「へ？事情聴取？私まだ捕まりたくは無いわよ。」

「ぶつちやけ無視しますが少々私の身元に起こった事から話をさせていただきますと……」

「長くなりそうね。立ち話……いや空中話は辛いでしょ？とりあえず中に入って。煎餅とお茶出すわよ。」

「ええ、ありがとうございます。それではお言葉に甘えて……」

和室の中に入っていった。勿論、魂魄妖夢も一緒である。

ここは妖怪の山のふもと。

「しっかし良くここまで情報集めたものね。」

「この幻想郷最速のブン屋、射名丸文ですから。と、聞いたのはここまでです。さて、貴方の番ですよ。」

今話をしているのは狂気の赤眼、鈴仙・優曇華院・イナバと幻想郷最速のブン屋、射名丸文である。今は情報交換中だ。

優曇華がルンルン気分で妖怪の山に帰って行く射名丸を見かけたの

で試しに精神波ミサイルを撃ったところ見事にかわされてこっちに向ってきたのでなぜそんなルンルン気分で帰って行くのか聞いたところ、

「どうしてそんな気持ち悪いぐらいルンルン気分なの？何かスクープでも見つけたとか。」

「確かにそうですが打ち落とそうとしたので言いませんが少し教えるならばちよっと博麗の巫女の情報が……」

優曇華は聞いてみる。

「ふうん。へんな妖怪と戦ったとか？」

文は言われた直後、瞬間的な速さでこう考えた。

「（どうやら知っていきそうですね。ここは引きずり出してみましよう。）」

そう結論づいたので聞いてみる。

「え？やっぱり貴方も戦ったのですか？」

「ええそうよ。滅茶苦茶強かったわ。なんなのあの強さ？しかも服装まで変わってるし。」

見事に引っかかってくれた。そして巫女の条件はクリアした。言っていることが大体一緒である。そろそろ種明かしをする射名丸文。

「……ニヤリ」

「え？」

「引っかかりましたね。つとまあ、これで確信できました。」

「くっ……引っ掛けたわね。」

「まあ落ち着いてください。どうやら貴方も戦ったんですね？これで条件はクリアしました。ここから神社まで行くのは遠いでしょう？一応巫女の話は聞きました。情報交換といきましょう。」

「なんだ。やっぱり知っていたのね。どうしてまた知らないフリを？」

「それも説明します。」

「と行って今に至る。」

聞いた情報は自分達が知りたいことがそのまんま見事なほどに答えになっていた。さて、今度はこちらが情報を開示しなければならぬ。

「そうね、私が教えてもらったのは巫女に聞けばわかるってのと、」

「のと？」

「紅魔館に行け、これだけだわ。そこにもっと強いやつがいるらしいのよ。」

「それは初耳です。これはまたいいネタが書けそうです。」

「いや、書いちゃ駄目だから。」

そんなこんなで情報開示と相談は終わった。まとめると、

「私は魔法使いの森の人形使いの方へ行って伝えてくるのね？」

「お願いします。何故か魔法店の方は人の気配が感じられなかった
ので。あと時間も伝えて下さい。私は再び巫女の元に行きます。」

そして二人は飛んで行く。優曇華は魔法使い、アリス・マーガトロ
イドの元へ。射名丸は博麗の巫女、博麗霊夢の元へ。

「魔理沙、大丈夫？」

「ああ、だいぶ良くなったぜ。」

ここは人形の森のアリス・マーガトロイドの家。アリスのベッドに
は若干やつれた魔理沙が寝ている。その横に椅子に座って心配そう
に見つめているのはアリス。あの時以来、アリスは魔理沙の看病を
している。

「いやあ、改めて言うけど助かったぜアリス。」

「全く、びっくりしたわよ。あの魔理沙が「ひッ・・・！嫌だ！来る
な！来るなああああ！」とか「嫌だ、死にたくない！死にたくない

んか無い！いやだああああ！」なんて叫ぶから。」

「それは言わないでくれ。」

「そうね。言わない約束だったわ。ところで気分はどう魔理沙？」

「正直、あまり良くない。やっぱりふとした瞬間にフラッシュユバツクする時があるからな。」

そういつて魔理沙は体を起こす。今の服装は白いアリスの寝巻きだ。

「アリス、1つお願いがあるんだ。」

「何かしら？水がほしい？」

「いやそうじゃなくて……その……今夜、一緒に寝てくれないか？」

「……え？」

「勘違いしないでくれ！えっと……そんな疚しい意味で言ったんじゃない……」

「ああ、純粹に一緒についてことね。いいわよ別に。それに……アリスが小さく呟く。

「魔理沙とだったら大丈夫だから……」

「え？今なんか言ったか？」

「いやなんでも無いから！」

「？」

そう不思議そうな顔になった時、ドアの鳴る音が聞こえた。来客とは珍しい。魔理沙に一言告げて行ってドアを開ける。そこにいたのは、

「久しぶりね。」

「……………月の兎が何か私に用かしら？」

言うまでも無い。鈴仙・優曇華院・イナバだった。

「へえ。貴方達も戦ったのね。あの怨霊と。強かったでしょ？」

「ええ。かなり常識はずれな力でしたね。私は天から落とされました。」

「あんただって全長10メートルぐらいの刀でぶった斬ろうとしたもんね。」

「だから覚えていません。けどそれは断迷剣『迷津慈航斬』ね。」

今は和室の中。ちゃぶ台を挟んで対談中である。一通り話を聞いた
霊夢は、

「で、今度は紅魔館ね。はあ、また行くのかあそこ。あんまり気が進まないなあ。」

「私たちよりも貴方たちの方が適任だと思います。あと、私はそろそろ天界にまた戻らなければいけません。少々仕事が溜まっているものでして。」

「ふうん。そうね。私達が解決に当たってみるわ。これが終わったら宴会でも開きましょう。」

「分かりました。天界の者も呼んでやりましょう。」

「こうなると早めに解決しないとね。あのメイドがいないと料理が間に合わない。」

「では解決はお任せします。私はこれで。」

そう言って、また空に飛んでいった。さて、善は急げ。早速解決に行くことにした。

「行き先は紅魔館、ね。一筋縄ではいかなそうね。」

「全くです。でも行かないわけにはいかない。早速行きましょう。」

「その前に1人また来客よ。貴方の信頼できない人がね。ほら。」

「あつ。」

空からやって来るのは射名丸。

「どうも、射名丸です。ちょっと情報を。」

と聞いて、手短かに話してくれた。内容はアリスにも手を回している
のでこの時間に紅魔館正門付近に集合してくれということだ。

「つまり皆で突撃ね。分かったわ。」

「では私は先に紅魔館へ回っています。」

と言ってまた飛び立っていった。

「さて、ちょっと時間があるから煎餅全部食べてから行きましょう。」

「

「ええ。腹ごしらえです。」

と言って、再び煎餅を焼いていく。

「ふうん。紅魔館にこの時刻に行けってことね。それで既に博麗の
巫女には手を回してあるのね。」

「そうだな。あいつが1人で行くとも多少無茶をすんだろ。じゃ、私
たちも行くか。」

ここはアリス・マーガトロイド家の自室だ。魔理沙がベッド、アリ
スがベッドの近くの椅子、優曇華がアリスの反対側に用意された椅
子にいます。優曇華から紅魔館の情報を聞いた魔理沙の発言に驚いた
アリスが言う。

「え？大丈夫なの魔理沙？」

「ああ、もう大丈夫だ。それに克服の意味も兼ねて行くぜ。」

「そう。なら私も行くわ。なんせ紅魔館よ？ロクなことが無いわ。」

「助かるぜ。」

そうやって話はまとまった。優曇華はもう用が無い。

「話がまとまったのね。私はこれでおさらばするわ。」

そういって、その場から消えていった。自分の波長を変えてどこかに行ってしまったのだ。集合の時刻まで少し時間がある。それぞれ準備をして行く事にした。

「じゃ、私は一旦家に帰って準備してから向こうに直接いくぜ。」

そういってアリスに背を向け扉に向っていく。それを

「ちょっと待って魔理沙！」

「ん？なんだ？」

振り返った瞬間、アリスと魔理沙は長い間唇を重ねた。

「んっ……………」

「ん……………」

長い間、唇を重ね続けた。濃密なひと時を過ごした二人は、

「行ってらっしゃい、魔理沙。向こうで会いましょ。」

「ああ、頼りにしてるぜ。」

そう言って魔理沙はアリスの家をあとにした。

約束の時間が近い。

「さて、紅魔館付近にやって来たわね。」

「やっぱりいつもの門番はいませんね。」

そんな会話をしているのは博麗霊夢と魂魄妖夢。そこに、

「お、先に来ていたか。」

そう言って箒に乗って飛んでくるのは霧雨魔理沙。しばらくして

「あら、一番遅かったかしら」

アリスもやって来た。これで主役はそろった。後は

「突撃して解決するだけね。早く終らして宴会の準備をしなきゃ。」

霊夢が言う。

「あら、開いてくれるのね。」

そう答えるのはアリス。

「楽しみだな。」

と魔理沙相槌を打ち、

「時間十秒前です。」

妖夢がしめる。

最後に霊夢が、

「よし！行くわよ皆！」

「」「」「おお！」

意気揚々、やる気は十分。そうして紅い門を押しに行く。

「ふん、やって来たわね。」

紅魔館ロビーで待ち構えるのは闇に染まった十六夜咲夜。

「私に勝てるかしら？」

そういって、残酷な笑みを浮かべていた。

黒魔の紅魔館・集結（後書き）

こんにちは。 靈刀村雨丸です。

これで9話目です。良く頑張った俺。しかも文字数が多い。これを三日で書き上げたとは思えん。

えー、前の反省から今回は真面目に書いてみましたがどうでしょうか？

・・・え？なんか前向きに下ネタがあるって？おいおい、あれカウントしたら俺何も書けなくなるぞ？前向きに捉えれば下ネタじゃなくて高度恋愛だよ！

次の話でついに戦闘が行われます。こうご期待を。

最近「GOD EATER BURST」買いました。アリサ可愛いぜ！でも神獣牙（これで素材合ってるかな？）が手に入らない！前と後が繋がっていない！そんなぐらい楽しいぜ！是非一度お試しあれ。

えー、分けわかない後書きになりましたがここまで書けるのも読者の皆様のおかげです！では次の話でお会いしましょう！

黒魔の紅魔館・敗北（前書き）

一応行間は広めに取りました。

後書きまでの体力考えるともう限界・・・・・・・・

黒魔の紅魔館・敗北

「もう少し……もう少しだから粘って頂戴……！」

ここは紅魔館大図書館の一室。パチュリーノーレッジは焦っていた。

「後ほんの数分稼ぐだけで良いから……！」

とにかく焦っていた。その言葉は誰に向けられているのだろうか？

「まだ、『希望』はあるから……！」

自分が持てる最高のスピードで魔導書に文字を書き込んでいく。そこに書いてある文字はパチュリー自身しか解読できないだろう。しかし、何をしようとしているのかは分かる。魔法の発動の準備だ。

彼女の持つ魔導書は魔法の『概念』や『効果範囲』など詠唱呪文を書き込むことで以後その魔法を高速で発動できるようになる。

例えば、火金符『セントエルモピラー』と言う魔法がある。これの『概念』は魔導書に、

「炎よ、その熱を以て相手を焼き尽くせ。金属よ、その柔軟さを以て相手に纏われ。熱は伝導する。ああ、金属よ天まで昇り炎の道を作らんことを。殲滅せよ、炎に焼かれ、金属に囚われる事で。」

と書いてある。こう書いた結果、火金符「セントエルモピラー」は相手に金属の弾を核とする火炎球を形成して叩き付け、金属を巻き上げることで巨大な火柱を起こすことが出来る魔法だ。

今パチュリーは出来上がった魔法を書き込んでいる。しかし書き込んでいる量が尋常ではない。火金符「セントエルモピラー」は100〜15ページ程度に収まるのだが書き込んでいる魔法は悠に100ページを超している。

「できた……………！間に合って……………！」

パチュリーは空気を操り出来る限りの速さで向う。

彼女は何処へ向うのか？彼女は何をするのか？何が起きるのか？そして何が変わるのか？その結果どのような結果を誰にもたらすのか？それは本人とその従者である小悪魔しか知らない。

「何事も無く紅魔館本拠の扉まで来ちゃったけど怪しくない？」

ここは紅魔館の玄関に当たるところだ。普通なら手下になっているであろう妖精メイド達が猛攻を仕掛けて来るはずだ。しかしメイドはおるか何もいない。何事も無く玄関に来てしまった。

ここは良いコンディションで戦いに望めることに喜ぶべきなのか、それとも不吉な予感として警戒するのか、どちらを取るか迷ってしまい霊夢は他のメンバーに聞いてみた。

「ああ、逆に怪しいな。」

「そうね、怪しいわ。」

「全くです。」

全員見事にぞっくりした答えを返してくれた。

「……………なんでそんなざつくりしているの？？やる気ある？」

「いや、ここで言い合ってもらちが明かん。」

「ちょうど何もいないところだし、中に入りましょ。」

「いや流石に正攻法は……………」

妖夢が言いとどまる。しかし、助言をしてくれたのは意外な人物だった。

「なんかそこしか開いてないよ。」

「お、フランじゃないか。久しぶりだ。」

「やほー、魔理沙。久しぶりー。」

あの悪魔の妹、フランドールだった。

「え？その玄関しか開いてない？」

「そつだよ霊夢。」

フランドールの話によると最近暇だからちよつと紅魔館本拠に向おうとしたら何故か繋がっている通路が封鎖されているので一旦外に出てありとあらゆる隠し扉を使って入ろうとしたけど見事に動かなかった。唯一開いているのはその玄関だと言う。

「もー、お腹減るし中華のお姉ちゃんやって来るして騒がしいんだよ〜。」

「中華のお姉ちゃんって………ああ、あの門番のことね。」

「あいつがお前の部屋に逃げ込んで来たのか。」

「なんか知ってるの魔理沙？」

「今からその原因を解決しに行くところよ。」

そこへ、

「フランドール様ー、何処ですかー。」

「ここだよここー。」

「あ！そこにいましたか！勝手に部屋抜け出しちゃ駄目ですよ！……
………つてあれ？皆さん？」

中華のお姉ちゃんこと紅美鈴だ。一通りメンバーを確認した紅美鈴は

「………皆さん、中に入るんですか？」

霊夢が答える。

「そうよ。解決しに行くの。」

「やはりそうですか。」

そして、

「誰が相手になるか分かってますか？」

答えたのは魂魄妖夢。

「恐らく……十六夜咲夜と言いましたか。あのナイフのメイド。」

「ええ。」

そして

「あまりこれは言いたくありませんでしたが……」

紡がれる言葉は、

「私の耳に間違いが無ければ……レミリア様が倒されたと思います。」

その叫びはやがて、

「嫌……行かないで……私を置いてかないで……
……うわあああああああ！」

今度は泣き崩れた。それを見た魔理沙が座り込み、泣いているフランドールと目線の高さを同じにして、

「大丈夫だ。あいつなら生きている。絶対に私達が助け出す。」

フランドールが顔を上げる。

「……ほんと？」

「ああ。絶対だ。だからここで待っていてくれ。」

魔理沙がフランドールを抱きしめながら

「だからもう泣くな。あそこの門番と大人しく待っていてくれ。約束だ。私も約束する。」

「……………うん、待ってる。だから、絶対お姉様を連れて帰ってきてね。」

「分かった。」

そういつて離れ、玄関である紅い扉の前まで歩き

「行くぞ、皆。」

霊夢が

「そうね、あの妹様の願いだものね。」

妖夢が

「あの人にはいろいろ料理を教わりたいですね。」

アリスが

「なんだかんだでお世話になっているからねえ。」

そして皆が扉を押す。扉が開き、皆が入って行く。それを見届けた美鈴が、

「大丈夫でしょうか、皆さん？」

「大丈夫よ。」

フランドールは言い切る。何故なら、

「だって、私を外に連れてってくれたぐらいなもの。」

中はいたって普通のロビーだ。しかし若干暗くそして紅い。そこに待ち受けていたのは、

「ふん、やって来たわね。」

「嘘……………」

「おいおい……………冗談だろ？」

「姿が変わっても怖くは無い！」

「なんか要らない物が生えたわね……………」

翼が生えた『闇』の色をまとう完全な従者、十六夜咲夜だった。

霊夢が聞く

「聞くけどあなたの主、レミリア・スカーレットは何処？」

「お嬢様ならあそこの部屋に放り込んであるわ。」

魔理沙が訊ねる。

「つまり死んではいないんだな？」

「死んではいないわ。銀鎖で縛ってあるから当分動けないけど。」

「魔力を弱める『銀』ね。」

アリスが呟く。

「……………」

妖夢は黙ったままだ。何を思っているか霊夢にだけは分かる。今、恐らく魂魄妖夢は昔の自分と照らし合わせているのだろう。かつて、愛するが故に大切な人を傷つけてしまった自分と。

113

「さて、雑談はここまで。私たちはあいつの妹からあいつを助け出させて言われているのよ。そこを退く気は無いかしら？」

「私を止められるのなら。」

「決裂だな。」

そういつて、霧雨魔理沙は箒を持ち直す。それに続いて博麗霊夢が御被い棒を構えアリス・マーガトロイドが人形と魔導書を取り出し

魂魄妖夢が刀を構えつつ、

「同じ間違った道を選んだ人を止める。これがせめての償いかな。」

そう1人ごちつて姿勢を正す。それを見た十六夜咲夜は手からいきなり枯れた薔薇を出して見せた。

「これは枯れてしまった薔薇。でも今の私なら……………」

そういつて茶色くなっている花を手で握り潰す。そこ出てきたのは燃える様に紅い薔薇。

「これが何を意味するか分かるかしら？そう、私は『時間逆上』まで出来るようになった。今の私は誰も相手じゃない。」

そういつて今度はナイフを手に出現させる。『時空操作』まで使用可能にした咲夜は構える。

「絶望を、見るわよ？」

「……………」

霊夢は何も答えず、しかし、

「行くわよ皆！」

「」「応！」「」

そう掛け声をかけて突撃した。

咲夜はまず上に跳躍。そして天井に向って無数のナイフをばら撒く。そのナイフはあたかも意思があるかのように全て床に刃を向ける。しかし、そのナイフは消えてしまった。それまでの時間、わずか1秒未満。

最初の動作に何も無いことが判明すると霊夢は『亜空穴』の為の始点ワープを開き終点ワープを相手の頭上に設置。相手を杭の要領で叩き込むように飛び蹴りを入れる。

咲夜は相手の動作について時空をずらす事で相手の動作を『先視』出来る。亜空穴を『視た』咲夜は相手が出る瞬間左にずれ回避。着地の隙を狙われた霊夢はどうしようも出来ない。

咲夜はナイフで斬撃をするが後ろから人形が飛んできた。仕方なく咲夜は右に跳躍。そうしたところ跳躍先に衝撃型爆発性魔力が詰まった瓶『グラウンドスターダスト』が投げつけられていた。今だ爆波は残っている。

咲夜は空中間の時空操作で自分の位置をずらし爆破の手前に着地。その瞬間を見切った霊夢が札を投げる。時間操作の隙を突かれた咲夜は諦めてガード。そして妖夢が弦月斬を繰り出す。しかし、

「・・・・・・・・！！」

相手は既にカウンター、『パーフェクトメイド』の準備をしているではないか。時既に遅し。幸いなのは1回目の斬撃がヒットしたため半分のナイフ、約20本は2回目の斬撃時に発生するグレイズで回避できたものの残り約20本が妖夢を喰らう。

「何とかいける！」

妖夢は刀使い。斬撃に関する身の使い方は取得している。勿論、相

手からの斬撃の時の身の受け方までだ。ダメージは軽減される。

霊夢は妖夢が40本のナイフに喰われるのを見る。しかし、助けるとは思わない。こんぐらいで死ぬ妖夢では無いと割り切る。そう信じて咲夜が出現する場所に博麗アミュレットを飛ばす。何度か霊夢は『パーフェクトメイド』を見たことがあり、出現の際に結界など空間形の技を使う人や妖怪に見られる空間の特有の『揺れ』があるのを知っている。このことは咲夜も予想外だった。

その結果、咲夜に博麗アミュレットが命中。隙が出来た咲夜に魔理沙が箒をぶん回して打撃。咲夜は吹っ飛んだ。その結果を見たアリスが

「ダメージがほとんど無い……?」

「私に膝を着かせただけでも上等よ。」

そう言つて咲夜は立ち上がる。4人相手に接近戦が不利だと感じた咲夜は周りにナイフを乱射。当たりはしないが移動が困難になる。霊夢は側転で回避。しかし、逃げ遅れたアリスにナイフが当たりそうになるのを霊夢は見た。これが致命的だった。

「く……!？」

肩に斬撃痕があり血が流れ出している。今付けられたものだ。乱射ナイフは回避したはず。ならば何処からか。答えは、

「魔理沙、上!！」

「そりゃ!！」

魔理沙がバックステップ。そこに3本のナイフが床に刺さる。

「ああ、まさか上に投げた物って……」

「どつやらナイフだったようね。」

咲夜は乱射し終え紅魔館の奥側に大跳躍、そして階段の手すりに着地。皆を見渡す角度になる。そして、

「発動。『デフレーションワールド』」

咲夜の周りにクロスして飛ぶナイフが出る。その速度はゆっくりだ。そのナイフが飛びつつも咲夜はゆっくりと霊夢や魔理沙、妖夢やアリスに向けてナイフを連続投射。しかしそのナイフも速度は遅い。

「ふん、ナメてんの？」

そういつてアリスがギリギリで回避する。元々、この幻想郷は何故かギリギリで弾を回避すると魔力が高まるのだ。

霊夢と魔理沙も回避する。しかしアリスとは違い、大振りに回避する。妖夢も同様、大振りにかわす。

そして、アリスがギリギリで回避しているのを見た魔理沙が、

「やめろ！危険だ！！」

「何言ってるの魔理沙！？こんなのが危険なはず」

であろうか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アリスは倒れていた。血が流れていく。もう起き上がることは無い。

『デフレーションワールド』、それは時空を縮小させる咲夜の奥義。縮小された時間は、短期間の過去と未来を同時に現在に映してしまふ。それらが全て襲い掛かる恐怖の技。

用は、ナイフの延長線上にいと死ぬ技だ。アリスはグレイズによる回避をしたため、真正面にナイフがあつたのだ。ナイフは当てなくていい。狙うだけのものとなつていった。幸いなのは懐に入れていた人形が壁となり、深くは刺さっていないことか。残るは3人。博麗霊夢、霧雨魔理沙、魂魄妖夢。

「くそ……………！よくもアリスを！」

そういつて魔理沙が箒に乗って突撃する。

「駄目よ魔理沙ー！！」

霊夢が忠告するが間に合わない。上から5本のナイフが落ちてきた。それは垂直落下するが魔理沙に当たる軌道。そして、

「……………」

妖夢が倒れた。背中と足、右腕に斬撃痕が1つずつもって。妖夢は魔理沙がナイフに当たる直前に楼観剣で魔理沙を峰打ち、自分を犠牲にする代わりに魔理沙を助けたのだ。

残るは霊夢と魔理沙。

何か呼ばれている気がする。なんだろうか？

「・・・か・・・て・・・さい・・・起き・・・
ください！起きてください！大丈夫で
すか！？」

相変わらず暗い部屋だ。もう何も見たくない。自分の愛する従者が刃向かって来たのだ。しかも私は負けた。裏切られ、全てを無くした私には何が残っているのだろうか？

しかし、今気づいた。誰かが話しかけていることに。つまり、この部屋に他に何かがいるのだ。その事実を再確認したレミリアは覚醒した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

「あ！やっと起きましたか！！」

「その声は・・・・・・・・子悪魔？」

「説明は後です！今左腕の鎖なら破壊できました！！」

見ると、子悪魔が自分を縛る銀鎖を破壊している。今なら左腕だけ使える。十分だ。

「子悪魔、下がって頂戴。鎖を破壊するわ。」

そういつて、左手から紅い鎖を出し右腕の銀鎖に差し込み紅い鎖に魔力を流し込んだ。銀と言えど所詮は金属。魔力になんて叶うはずが無く、軽快な音を立てて銀鎖が壊れる。

今度は右腕と左腕から紅鎖を出し、足に接続。魔力を流し込めばや

はり軽快な音を立てて壊れる。最後は自分の胴体を縛る銀鎖に接続。全ての鎖が崩れ落ち、レミリアは復活。

「さて子悪魔、説明をして頂戴。」

「分かりました。実はですね……………」

一通り話を聞いたレミリア。分かったのは今霊夢たちが戦っていること。霊夢たちが撃破されるのは時間の問題であること。そして、

「ふうん。パチエがね。やるじゃない。」

「ですから、レミリア様には最後の戦いに出て欲しいのです。」

「分かった。今はパチエが頑張るのを祈ることね。でも私は準備運動してるわ。」

「はい。備えていてください。」

小悪魔が呟く。

「パチユリー様、どうか御武運あれ……………!!」

「く……………どうすれば……………」

「流石に辛いわね……………」

妖夢が倒れてから十分、激しい戦闘を行い既に二人の体力が限界だ。咲夜がすかさず『マジックスターソード』を投げる。霊夢はガード、魔理沙はジャンプ回避をする。しかし、天井ナイフが落下し魔理沙に当たる。魔理沙は身を捻ってよけたが、

「終わり。傷魂『ソウルスカルプチュア』」

無数の連撃が霊夢と魔理沙を襲う。霊夢はガードを続けてしまった為、途中で霊力切れになる。魔理沙は身を捻っていた為一瞬出遅れた。魔理沙がガード姿勢を作るももう遅い。

「がっ……………!!」

「くあ……………!!」

そして二人は倒れる。

今、立っている者はいない。終わってしまったのだ。

「ふん、手ごたえはあったけど私の敵ではないわ。」

咲夜は見渡す。もう立っている者はいない。そう言って振り返り、その場を後にしようとした時だ。

「待ち……………な……………ね……………い」

辛うじて立っている霊夢がいる。

「まだ………終わり………じゃ………無
いわ」

御被い棒を杖にして足を震わせながらも立っている。

「その無様な格好でも私と戦うと言っの？」

霊夢は答えない。今、御被い棒無しで立つことが出来た。咲夜は苛立つ。

「さっさとくたばれ。」

暴言一つ言い残しナイフを構える。そして、

バアアアアアアン

「咲夜……！！」

扉が開いた。そこにいるのは……

黒魔の紅魔館・敗北（後書き）

靈刀村雨丸です。とうとう二桁行きましたよ。ばんざあい。

なんかどんどん字数が増えてる。その分疲労がヤバい。

今回は敗北です。しかしそこで終わりじゃないのがお約束。ありき
たりすぎて鼻水が出るね。

最近美術の宿題で来年が兎年なので兎の年賀状書いて来いという宿
題が出ました。

ここで問題発生。

はて、私は鈴仙・優曇華院・イナバを書くべきなのか因幡てゐを書
くべきなのか。どっちにすれば良いのだろう？

ちなみに去年にもこの宿題出ただけどその時は「トラドラ！」書
いちゃったんだよね。そのころ寅丸星知らなかったからねえ。

と言っわけで、募集中だぜ。

毎回毎回後書きがグダグダですが、ここまで書けるのも読者とほか
の皆様のおかげです！ありがとうございます！ではこの辺で。さら
ば！

黒魔の紅魔館・絆（前書き）

これで黒魔の紅魔館の話は終わりです。

一応東方反乱録はこれで終わりでは御座いません。ご心配なく。

黒魔の紅魔館・絆

「咲夜……………」

扉が開いた。そこにいるのはパチュリー・ノーレッジ。手には開いた魔道書。

「ッ！パチュリー・ノーレッジ！」

「時空幻『ヘリオドライブ』！」

彼女、パチュリー・ノーレッジの周りにそれぞれ『火』『水』『木』『金』『土』『日』『月』を司る妖精が出て来る。妖精は飛び舞い、次第に上空へと集まり、衝突し、一つの輝く球体が出現する。

輝く球体からおもむろに三体の妖精が現れる。色は漆黒、金色、白銀。

漆黒の妖精『クローズ』、司るは『時』。金色の妖精『ヘカント』、司るは『空』。白銀の妖精『イノセント』、司るは『幻』。

時空幻を司る上位三元属の妖精は球体を三角形に囲む。球体は次第

に光を増して、

「ちせはしないー」

パチユリー・ノーレッジの使う魔法がどのような物かが判断できた
咲夜がナイフを投擲。時間加速が掛けられたナイフは高速でパチユ
リーに向う。パチユリーの肩から鮮血が吹き上がる。しかし、パチ
ユリーはそれでもなお、自分の役目を全うした。

「後は……………任せるわ……………」

そういつて、パチユリーはその場に倒れこんだ。咲夜には聞こえな

かったその言葉は誰に向けられたのだろうか？

球体が破裂した。中から幾千もの光が舞い落ちる。その内の四本は霊夢、魔理沙、妖夢、アリスに突き刺さる。他の半分は紅魔館の中を取り囲み、残りは咲夜に向う。

「がああああああああああああああ！」

咲夜の絶叫が上がった。その体には何本もの光が刺さっている。しかし、その光も束の間、すぐに消えてしまった。突然の激痛は開放された。

パチュリーは咲夜に止めを刺そうとしていたに違いない。ならば、こんな生易しいものは用意しないだろう。

「何故、五元属魔法を使ってこなかった？無茶までして人工妖精を作ったのかしら……」

その答えは、

「多分あなたの時間操作の封印魔法だったんだろ。」

「!!!」

かつて倒れた、四人が立っていた。

「いやびっくりだわ。魔法があたって死ぬかと思ったたら体力満タン、それになんか力もいつも以上に入ってくるわ。」

「いやパチエも無理したもんだな。まさか人工妖精を作り出すとは。私はこの手の魔法は苦手だな。」

「私の人形があ魔法のせいで意思疎通と伝播まで出来るようになっちゃった。」

「いつもより体が安定しています。刀も十二分に魔力がある。戦える！」

そう言つて、咲夜を見る。咲夜は自分が時間操作が出来なくなつているのに驚いていたが、こちらを見たところ更に驚愕した。しかし、すぐに落ち着きを取り戻し、

「何度復活したつて同じよ。次は殺^{あや}めるわ。」

「今のお前に勝ち目はあまり無い。時間操作が出来ないんだからな。」

「はン？時間操作が無くても勝ち目はあるわ。それにこの魔法は制限時間があるようね。見たところ五分。耐え抜いて見せるわ。」

そして両者は再び激突する。

結界が飛ぶ。ステップを踏む。ミサイルが飛来する。身を捻る。刀が斬る。側転を入れる。人形が囲む。跳躍する。咲夜は防戦一方だった。時間稼ぎもそうだが、やはり第一は時間操作封印だろう。向こうは能力が上がっている。激しい攻撃はなお止まらず。戦闘の疲労でついに咲夜が、

「くッ！」

足を挫いた。そこを見逃さない妖夢。

「甘い！」

「・・・・・・・・・・！」

妖夢は投げ技『折伏無間』の応用で上に放り投げる。これを狙ったアリスが、

「注力『トリップワイヤー』！」

設置された人形が他の人形にレーザーを放ち、一つの魔方陣を形勢。咲夜を空中で束縛する。咲夜が悲鳴を上げる。最後の一撃を決めよ

うと霊夢と魔理沙が構えを取ったその時、

「咲夜を止めるのね。私にも参加させて頂戴。」

「あんた！」

「レミリア！生きていたか！」

永遠に幼き紅き月、レミリア・スカーレットだ。

「私はこの紅魔館の主にして咲夜の主よ。ここで起きた身内の事件は私がかたを着ける。でも、願うわ。霊夢、魔理沙、力を貸して。」

聞いた霊夢と魔理沙は

「そうね、三人、いや、五人で何とかしましょうー！」

「まったく、いいところ持ってかれるぜ！」

そういつて、霊夢は御札、魔理沙はミニ八卦炉、レミリアは紅い槍を構える。

「咲夜。私は、間違いを止める為に、今、あなたを倒す。でも、約束して。絶対、絶対私の元に返ってきて！」

そして、三人の声が重なる。

「『『『霊恋槍』神・マスターブレイク』！！！！』』』」

霊夢の神霊『夢想封印』、魔理沙の恋符『マスタースパーク』、レミリアの必殺『ハートブレイク』が一つになり、一本の巨大な、虹色の槍が形成される。その槍は真っ直ぐ咲夜に向う。そして、

「嫌あああああああああああああああ！！！！！！！」

咲夜に虹色の槍が突き刺さり、貫通し、絶叫が渡る。そして、床に落ちた。

「終わったのね……………」

レミリアがうつむいて呟く。

「いや、まだよ。」

霊夢が否定する。そう、やることが残っているのだ。

「出て来なさい。怨霊さん？」

レミリアが驚いて霊夢を見た後ボロボロ咲夜を見る。そこには、咲夜の形をした怨霊がいた。

「いやちよつとは手加減してよ。危うく本体ごと持ってかれる所だった。」

怨霊が言う。

「あなたの意見はどうでもいいから動機を教えなさい。」

「そうだねえ。超根本的な原因はその吸血鬼にあるね。」

そういって、レミリアを指で指す。レミリアは何も言うことが出来ない。

「私は、夜、この咲夜を見た。彼女は、悩んでいたよ。自分は最近お嬢様に構ってもらえない。嫌われたのか。そんなことだね。」

レミリアは咲夜の気持ちを聞く。

「咲夜は悩んだよ。自分の何が原因なのか。どうすればいいのか。考えれば考えるほど暗い気持ちになり、心の決定的な『隙間』を見せてしまったんだ。乗り移って分かったけど、彼女は凄く強い。それ故、心の隙間に漬け込まれたとき君を傷つけてしまったんだと思う。」

レミリアは呆然とする。

「まあ、そろそろ消えるから言い残すけど、そこのお嬢さん？一緒に寝るとかしてちゃんと構ってあげてね？」

そういって、消えていった。レミリアの戦いは終わったのだ。

その後、アリスと妖夢が後片付け、魔理沙はパチュリーの介護、霊夢とレミリアは一旦咲夜を運び咲夜の自室に寝かせる。その後、

「このメイドにもそんな一面があるのね。苦労もしてるのね」

「……………私、咲夜があなる前に、咲夜に悪戯いたずらで突き放したことがあった。」

レミリアは言う。

「それから、咲夜は自室から出て来なくなつた。私は謝る機会を無くしてどうしようも無かつた。」

「だからそうだったのね。」

霊夢が口を開く。

「それほど咲夜はあんたを信頼しているのよ。今日はちゃんと仲直りして一緒に寝るのよ？いいね？」

そう言って、部屋から出て行った。

その後夜になり、咲夜は目覚めた。まだ体は痛むようで、ベッドの中だ。

「咲夜、大丈夫？まだ痛い？」

「ええ。少々体が痛みますが結構大丈夫です。」

そう言ってベッドの中で微笑んだ。レミリアは意を決し謝罪する。

「咲夜、ごめんなさい。あなたの気持ちも分からず前にあんな事言っってしまった。悪ふざけが過ぎたわ。ほんごめんなさい。」

「いえ。謝るのは私の方です。私とした事がお嬢様を傷つける事になってしまいました。ご無礼お許し下さい。」

「ええ。私は咲夜を許すわ。だから、私も許して……」

「もちろんです。明日はフランドール様とパチュリー様、美鈴に謝って次は神社参りです。」

そう言って咲夜は笑顔になる。嬉しさのあまりレミリアは、

「さくやあゝ!!」

「あわわ、お嬢様ちよつと苦しいです」

「良いじゃない別に。それよりも、今日一緒に寝よ!」

そう言ってもぞもぞベッドの中に入ってくる。

「いいですよお嬢様。私でよければ。」

「咲夜じゃないとイヤー!!」

「ありがとうございます!!」

そう言って咲夜もベッドで寝る。レミリアは嬉しさと介護の疲れで腕にくっ付いたまんま寝息を上げている。

さて、明日から忙しくなりそうだ。掃除洗濯炊事何から始めようかしら??

黒魔の紅魔館・絆（後書き）

こんにちは、靈刀村雨丸です。まあ頑張っちゃったりしたんで11話目を出せました。え？何？4部作構成だと聞いた？別にいいじゃんかいいじゃんか。

えー、咲夜無双もここまです。咲夜様から時間操作取ったら銀髪姉メイドとか神がかったつつつか俺の範囲ど真ん中というか……

これで黒魔の紅魔館編は終わりです。いやみんな紅魔館メンバーおつかれ。ちなみに土曜日に出していますが日曜日に書けたら書きたいものがあるので一日前に投稿です。

まあここまでこれたのも読者のおかげです。ここに感謝の意を。

ではまたいつか。

反乱録〜side story〜(前書き)

今回は軽くサイドストーリーです。設定は紅魔館の後。

反乱録 side story

～アリスとチルノと大妖精と～

アリスは紅魔館の事件が終わったあと、湖に向った。約束を果たす為だ。

「大妖精とチルノはいるかしら？」

「あ、はい、ここですここです。」

「あたいを呼ぶとほいい度胸ね！」

湖の畔。アリスは大妖精とチルノを交えてちよつとしたゲームをする事にした。アリスがルール説明。

「ルールは簡単。私が森の中に上海人形を隠したわ。それを見つかるよ。制限時間は30分。」

「簡単ですね。」

「あたいにだって出来る！」

「でもまだルールは続くわよ。人形は全部で五つ。多く集めて私に持ってきたほうの勝ち。途中、何をしてても良い。」

「………む？」

「え？じゃあ大ちゃんから人形奪っていいの？」

「そうよ。待ち伏せもよし、罠を張るのもよし、奇襲もよし。とにかく、私に多く持ってきたほうが勝ちよ。」

「チルノちゃん、今回は本気だからね？」

「フ、このあたいが大ちゃんに負けるとでも？」

「いい感じね。最後に一つ。上海人形は赤色、他の人形は青色よ。青色の人形は情報を教えてくれるかも知れないし爆発するかも知れないから気をつけて。あとこれを持って。この黄色の人形は時間が来ると教えてくれるから。」

「分かりました。」

「わかったわ！」

アリスが笛を持つ。

「よーい………ピーーーーー！」

こうして、チルノと大妖精の人形ゲームは始まった。

森の中、ゲームが始まった大妖精は、

「うーん、何も手がかりが無いなあ……………」

そう言いつつ飛び回る。その時

「！」

近くの木に青い人形が置かれている。それも堂々と。

「やった！見つけた！」

そう思い、急いで近づく。しかし

「？」

目の前の空間が光った気がした。良く近づいてみると、

「これは……………ワイヤー？」

空間に一本の透明な線が入っている。今にも切れそうだ。大妖精は線を視線でたどる。

「あ……………」

横の木につながっており、更にその木には端に石をくくりつけたネットがある。恐らく、このワイヤーが切れたらネットがこっちに飛んでくる仕組みだろう。

「危なかった……………」

そういつつしゃがんでワイヤーを回避する。そうして人形の元にたどり着き、

「ふふ、1個目Get!」

チルノは、焦げていた。

「ううゝ。お人形さんが爆発したよゝ」

チルノは青い人形を見つけ、それを取って動かしたところ人形が爆発した。どうして爆発したのに焦げているだけかは謎である。

チルノ意気消沈。帰ろうとしたその時

「痛ッ！」

チルノに何か当たった。頭をさすりながら落ちた物を確認する。

「なんだよこの青い……人形じゃん！」

爆発の勢いで上海人形も落ちてきた。かくしてチルノは痛い思いをして1個Getしたのであった。

開始から二十分経過、アリスは

「あら、大妖精はこの人形で・・・・・・・・チルノはこの人形に聞いているのね。なら、こうして・・・・・・・・こうで・・・・・・・・」
「よし」

何かの作業をやっていた。紛れも無く森の中の人形を操っているのである。

「つぶつぶ、面白いことになりそうね。」

「えーと、たしか大きな木の近くにあるって・・・・・・・・」

大妖精は青い人形に教えてもらった通りに道を進める。ちなみに人形所持数は2つ。そして、

「あ、あれが大きな木ね。」

確かに周りより一回り大きな木があった。しかもよりによって幹の根本に置いてある。

「よし！これで……！！」

幹に向って走る。だが、

「あ、見つけた！あたいうてば天才………って大ちゃん！」

チルノだ。人形所持数は2つ。

両者、猛ダツシユ。先にたどり着いたのは、

「よし……」

「あ！」

大妖精だ。大妖精は人形を取るとたちまち引き返す。チルノも負けではいけない。氷柱をショットガンみたいに乱射して妨害。しかし大妖精もやる。木の間を縫って移動し、氷柱を木に当てて回避する。乱射が途切れた瞬間を狙って苦無投げ。

この勝負は普通に考えると大妖精が不利だ。神経の消耗が激しく、疲労でいつかは被弾する。

「う、まずいわね。どうすれば………あ、そうだ！」

考えがひらめく

「あれ？大ちゃん曲がった？」

いきなり大妖精が曲がった。こちらにとっては好都合だ。神経消耗は向こうのほうが激しいはず。

「どんなことを考えてるから知らないけど人形はあたいのものよ！」

チルノは出力上げて追いかける。

「あ、やっぱり着いて来た！」

大妖精は自分が初めて人形をゲットしたところに向つ。

「あ、見えた！」

よく目を凝らすと見える。一本のワイヤーが。これは賭けだ。

「引つかかって……!!」

そう思い、飛行する。今、ワイヤーをギリギリの位置でくぐり抜けた。フェイントであたかも落下するように。

チルノはみた。

「あ……!!」

大妖精がふらついて一瞬落ちるのを。

「大ちゃん限界が近いのね……!!」

チルノは限界まで羽を羽ばたかせ、一気に距離を詰める。

「あたいの勝ね……!!」

そして、

「よし！」

プツン。

「きゃあー！」

見事にチルノがネットの餌食となった。

「何これ！と、取れない！」

「引つかかったねチルノちゃん！」

大妖精はそのまま飛行して逃げて行く。

「だ、大ちゃん待って〜！」

「あら、あれは……？」

湖の畔、アリスは一人帰ってくるのを見た。どうやら大妖精のよう
だ。

「あら、大妖精。時間まで後五分あるわよ？」

「人形3つ取ってきました！」

見ると確かに上海人形が3つ

「本当だ。これは……」

つまり、

「大妖精、あなたの勝ち！」

「やったあ！」

くるくる回る大妖精。アリスはあらかじめ用意したプレゼントを渡す。

「はいこれ。優勝商品よ。」

みると自分の形をした人形ではないか。

「え？いいんですか？」

「いいわよ。大切にしてね？」

「もちろんです！」

そして、軽く雑談をし、アリスは帰っていった。大妖精は一言、

「今日はとても楽しかったなあ！」

「ううゝ、誰かゝ、助けに来てゝ。大ちゃんゝ」

誰もチルノがつかまりっぱなしなのはアリスはともかく大妖精も忘れていた。

「魔理沙とアリスと」

魔理沙は紅魔館の事件が終わった後、アリスの家に行った。アリスは魔理沙がやってきたことに驚きながらも家に迎え入れた。

「魔理沙どうしたの？何かあった？」

「.....」

魔理沙は黙ったまま何も言わない。

「ねえ！？魔理沙何か変よ！！」

「・・・・・・・・んだ・・・・・・・・」

魔理沙が何かを呟いた。アリスには聞こえない。

「え？何魔理沙？」

「・・・・・・・・怖いんだ。」

「・・・・・・・・魔理沙、」

「私は、怖いんだ。いつ、あのメイドみたいになるか分からない。もしなったら、お前を、アリスを傷つけてしまうかも知れない。霊夢も傷つけてしまうかも知れない。私は、それが怖いんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「自分の周りの妖怪や人間が、もしなつた時、私は」

「言わないでっ！！」

「！」

魔理沙は顔を上げる。アリスは、泣いていた。泣きじゃくっていた。

「私だって・・・・・・・・怖いわよ・・・・・・・・」

アリスは震える声で言う。

「私だって・・・・・・・・魔理沙が・・・・・・・・もし・・・・・・・・もし
ツ・・・・・・・・！」

魔理沙は気づいた。

「嫌よツ！・・・・・・・・魔理沙が・・・・・・・・！！
・・・・・・・・」

アリスも自分と同じものに怖がっていた事に。それ故、

「アリス。」

「ツ！魔理沙・・・・・・・・」

アリスを深く抱きしめる。

「ああ、お前も、同じだったか。悪かったな。」

「・・・・・・・・・・うう」

「もう、大丈夫だ。私が弱気になっていたみたいだ。でも、皆同じだ。だから、もう、後ろを見たりはしない。」

そう言って、魔理沙はアリスと唇を重ねる。アリスは抵抗しなかった。

「んっ・・・・・・・・・・」

「ん・・・・・・・・・・」

魔理沙は自分の闇を払ってくれる人が欲しかった。アリスも、自分の闇を払ってくれる人が欲しかった。その衝動は、お互いを欲し、お互いの心を埋めようとした。

重ね合うことだけじゃ物足りないのか、魔理沙とアリスはお互いに

衣服を脱いだ。

「アリスう……………」

「魔理沙あ……………」

お互いはベッドで横になる。手を伸ばし、伸ばされ、自分の届かない場所に手が入り込む。

その後も、魔理沙とアリスはお互いを求め続けた。

そして二人には、真っ白で、純粋な愛が残った。

く咲夜とレミリアと霊夢とく

紅魔館の事件の翌日。和解し、レミリアと一緒に寝ていた咲夜は朝

の光で目が覚める。

「ふわあ。ん、んん」

久しぶりに気持ちよく目覚めることが出来た。いつもは、掃除やらレミリアの御飯の管理やらで睡眠は時間圧縮に任せて取っている。一時間しか寝てないのに三時間寝た感覚は良いとは言えない。

「たまにはちゃんと寝るのもいいわね。っとお嬢様は……
・あらあら。」

見るとお嬢様、レミリアは隣でぐっすりと眠っている。咲夜はやる
ことがいっぱいだ。

「さて、朝は掃除に洗濯、終わったら皆のところに戻って謝罪。その後に炊事で、午後は博麗神社に参りに行きましょう。」

一日の予定を確認した咲夜はベッドから出て一瞬でメイド服に変身。そして部屋を後にした。

時間操作でホコリを舞い立たせないなどして三時間ほどで掃除は終わった。洗濯物もまとめて洗って干し、ささっと終わらす。後は謝罪だ。先ほど、美鈴なら門で居眠り中だったのでナイフを投げつつ謝罪した。次はパチュリーだ。咲夜は一瞬で消え、大図書館に移動。

紅魔大図書館。それはパチュリーの住む紅魔館の一室。中は大量の魔道書などの本で埋められており、その部屋の奥の小部屋にパチュリーが住んでいる。

「パチュリー様、どこに居られますか？」

「あ、咲夜様！」

声に反応したのはパチュリーの助手、小悪魔だ。

「あら、あなたはパチュリー様の……」

「まあ助手をやってる子悪魔です。今ちよつとパチュリー様は魔道書の執筆中で手が放せません。」

「あ………そう。分かったわ。謝りに行きたかったけど、仕方ないわね。無理はするなって言っておいて。」

「分かりました。」

そう言って、子悪魔は奥の本棚の方に消えていった。咲夜は栄養不足が仇となったと取り、紅魔館地下に向う。

大図書館、奥の小部屋。

「咲夜は？」

「ええ、何処かに行きました。謝罪に回っているようです。」

「そう………」

ベッドで寝ているのはパチュリー、その傍らには子悪魔。小悪魔が、

「良かったですか？咲夜様を追い払って？」

「これでいいのよ。まだこれがあるし……」

そう言って自分の右肩を指す。そこには包帯が巻かれており、血がにじんでいる。出血は止まったが服を着られる状態ではない。

「これのせいで咲夜に不快な思いを与えたくないわ。そうじゃないと咲夜に会わせる顔がない。」

紅魔館地下、ここには495年の間封印されていた悪魔の妹がいた。フランドール・スカーレットだ。最近では魔理沙がよく紅魔館にやってくるのでそのついでにフランドールもやってくるのである。

今日は魔理沙は来ていないのでまだ地下の自室にいるはずだ。

「フランドール様、いますかー？」

「わあああああああ！」

どかーん。鉄の扉が吹っ飛んだ。すごい勢いで出て来るのはフランドール。

「咲夜！元に戻ったのね！戻ったのね！」

「い、妹様もお元気で何よりです！」

フランドールが腰に抱きついていて、がいつ死ぬか咲夜にとっては結構な恐怖である。

「私、心配したんだから！」

腰から上を見て咲夜を見つめるフランドール。プラスアルファで涙目はいろんな意味で結構な破壊力だ。

「ええ、大丈夫です。もういつもの十六夜咲夜ですよ。心配してくれてありがとうございます。御座います。」

「わあああああああ！」

腰にほおずりしてくるフレンドール。破壊力抜群。主に理性のほづが。

「そうですね、この後おゆはんの準備をしたら外に行きましょう。」

「え！？ほんと！？やったあああああああ！」

そろそろ行かないと時間もそうだが理性がまずい。咲夜はフレンドールを放し、準備をしていくと言っていないなくなった。

おゆはんの下ごしらえは主に咲夜とパチュリーと紅美鈴の分をした

後にレミリアとフランドールの分をする。今日はウナギなので米をいつもより多めに炊いておく。パチュリーは良いのだが美鈴がまあよく食べる。どうして太らないのか不思議なくらいによく食べる。

レミリアとフランドールの主食は『人間の血』である。紅魔館の近くにある別室に食材用の『人間』が保管されてある。咲夜は脳だけ時間停止をして『血』だけを抜くので暴れたりはないがあまり精神的にはよくない。咲夜は無心でこれを行う。しかし、毎晩そうして『食べられた』人間への祈りは欠かさないと言う。だって、彼女、咲夜も人間なのだから。

午後、咲夜は約束どおりレミリアとフランドールを連れて外出。着いた場所は博麗神社。

「あら、珍しいお客さんね。咲夜とレミリアと……」

「あ、霊夢だ〜」

「げ、フランドール！」

博麗神社の巫女、博麗霊夢はフランドールを見て一歩後ずさる。

「咲夜、さっきから聞きたかったけどどうして連れて来てるのよ。」

「フランドール様が外に出たいと言っていたのでついだよ。」

そう言っって前を見る。

「……」

「ぶーぶー、いいじゃん。」

霊夢が若干怒ってフランドールが文句を言っている。

「そういえば、何しにきたの？」

「ああ、そうでした。まあ一言で言つと私の暴走止めてありがとうってことですよ。」

「何だ、そんなことね。」

そう言って霊夢はいいことに気がついた。

「あ、ならちよっと手伝ってくれない今度？」

「何をですか？」

「今度ここで宴会を開くのよ。その時の料理を頼みたかったの。今回はまあこの『異変』もあったことだし、とても大きくしてしよう
とね。」

「お嬢様、よろしいですか？」

「いいわよ別に。私も久しぶりにぱあ〜っとしたいわ。」

「なら決まりね。」

霊夢は手を打つ。

「私は明日に備えて会場の準備と呼びかけでもしとくから、咲夜は料理を持ってきて。時間操作使えばそのままの美味しさで食べられるしね。」

「分かりました。多めに作ってきます。あ、じゃあもう準備しとかないと。お嬢様、妹様、帰宅しますよ。」

「まるで何しにきたか分からないわ。」

「散歩だと割り切ってください。」

「じゃあね霊夢〜」

そう言って飛んで帰っていった。見送った後霊夢は

「さて、さっさと準備をしないと。まずは境内でも掃除しますか。」

そう言って博麗神社の中に入っていった。

咲夜は紅魔館に戻った後、明日の食材の下ごしらえを始める。野菜を切り、魚を下ろし、肉を捌く。さて、明日はもっと忙しそうだ。咲夜はそう思いつつおゆはんの時間まで下ごしらえをしていた。

反乱録〜side story〜(後書き)

こんにちは、 靈刀村雨丸です。

まさかの12話目です。いやあ、よく頑張った私。

今回後書きで言いたいののは『〜魔理沙とアリスと〜』で、どこまで書いていいのかです。本当はもっと書きたかった。けどどれ以上書いたらたぶんデッドゾーンだろう。うーん、なんかもやもやするなあ。

一応あれの設定は夜の9時に訪れて12時に二人そろって眠ったと言っ感じです。

ここまで書けるのも読んでくれる皆さんのおかげです。まだまだ頑張りますので今まで、そしてこれからもよろしくお願いします。

宴の始まり（前書き）

今回はサイドストーリー＋予告（？） 見たいな感じ

霊夢が天界と永遠亭一同を、魔理沙とアリスが妖精などを、妖夢が白玉楼一同を、咲夜が紅魔館一同を誘った。なぜかメデイスンや小町まで来ているがそれは彼女ら曰く

メデイスン・メランコリー

「翼の生えた妖怪に聞いたわ。」

小野塚小町

「新聞記者に聞いたさね。」

四季映姫・ヤマザナドゥ

「こらー小町！！仕事サボるなー！！」

小野塚小町

「え、映姫様！？い、今ぐらいは良いじゃないですか」

四季映姫・ヤマザナドゥ

「……………もう、今回だけですっ」

恐らく射名丸文のせいだと言うか後半関係無くなってきているが宴会は沢山集まっている方が楽しいので気にしない。霊夢は酒を配りにいるいるな場所に周りにいく。

西行寺幽々子

「ほら、妖夢も飲みなさい！」

魂魄妖夢

「いえ幽々子様、それはちょっと……………」

八雲紫

「いえ、妖夢今は飲みなさい。」

博麗霊夢

「はいお酒よ。」

魂魄妖夢

「うげ……バットタイミング……！」

幽々子&紫

「うふふふふふふふ……」

不吉な予感がしたので次に周ろうと霊夢は思う。きつと妖夢の叫び声は気のせいだ。そう思いたい。さて次は……

鈴仙・優曇華院・イナバ

「お薬販売中でーす！胃腸が悪くなった人はこちらへー！」

八意永琳

「うい……ひつく……」

蓬莱山輝夜

「えーりん！えーりん！！（汗）」

八意永琳

「うふふふふ……ちょっとその兎……お姉さんと一緒に良いことしない？」

因幡てゐ

「ひえええええ遠慮します!!」

八意永琳

「日本の風習は……一度断ってから頂くのよね……
・・・慎み深いわあ……」

因幡てゐ

「遠慮します遠慮します遠慮しますいやマジですよ!？」

八意永琳

「三倍慎み深いのね……良い子だわ……」

因幡てゐ

「嫌あああ連れてかないでえええええ助けてれいせえええん!
!」

鈴仙・優曇華院・イナバ

「てゐ……生きて帰ってきてね……あ、どう

上白沢慧音

「まだかもこおおおお」

輝夜&妹紅

「どつしよっ!?!」

など悲惨な状況が起こっているのとおりあえず慧音に酒を渡して撤退。永琳とてゐは見えないことにする。一緒にいると巻き込まれそうなので次に行く霊夢。

伊吹萃香

「あははははやっぱ宴会楽しいなあ!」

比那名居天子

「そうね。こつち人界に来て楽しむのもまた良いわね。つーかアンタ酔い過ぎ。酒は微酔にするべきね。よってフラフラは最悪よ。」

博麗霊夢

「もうそいつはどっしようも無いわ。見逃してあげて。」

伊吹萃香

比那名居天子

「もとよりそのつもりよ。しっかしほんとに鬼の一族なのね。弾幕がかなり強くてびっくりしたわ。」

伊吹萃香

「だからいったじゃんか」

永江衣玖

「総領様、こんな所にいましたか。あ、酒ください……。ありがとございます。さて、私にいつ宴をやるか教えなかった罰として………」

比那名居天子

「ちよつと待って！だから、その……。悪戯心よ」

永江衣玖

「……………えい」

比那名居天子

「いやああああああああああああああああああああああああああああ………」

伊吹萃香

「鬼の技で〜いかせてやる〜」

だんだんエスカレートしてきたので撤退。途中、「あひん!!!」
「そつちらめえええええ!!!」など聞こえるが電流流しながら鬼技は
多分天子しか食らえないだろう。しかも龍宮の使いの言っているこ
とがかなりすごい。頑張れ、天子。そう結論付いたので移動。

チルノ

「あたいもお酒が飲みた~~~~~い!!!!!!」

大妖精

「駄目だよチルノちゃん。前に飲んだら飛べなくなっていたでしょ。」

レティ・ホワイトロック

「.....馬鹿ね。」

リリーホワイト

「レテイさん……既知なことを今更言っても意味無いです。あ、お酒飲みましょう?」

レテイ・ホワイトロック

「あなたなかなかやるわね。今我ながら背筋が凍ったわ……はい乾杯。」

リリーホワイト

「乾杯」

博麗霊夢

「こっちはいろんな意味で冷えてるわね。はいお酒。チルノは牛乳。」

大妖精

「あ、ありがとうございます。」

レテイ・ホワイトロック

「私はも……」

リリーホワイト

「私にも下さい・・・・・・・・まさかレティさんもツギブですか？」

レティ

「・・・・・・・・・・上等・・・・・・・・・・！」

チルノ

「・・・・・・・・・・あ、いい事思いついた！聞いて大ちゃん！！」

大妖精

「なんですか良いことって？」

チルノ

「あたいがこの牛乳飲んで体振ってゲロ吐けばアイスができるのよ！あたいってば天才ね！！」

大妖精

「・・・・・・・・・・チルノちゃん天才だね！！！」

レティ&リリー

「ぶツ・・・・・・・・・・！！」

大妖精

「（すいませんレティさんリリーさん・・・・・・・・こつでもしなきゃ

機嫌が取れないもんで……「了承下さい……」

レティ

「(あなた苦勞人ね……後でゆっくり飲みましょう?)」

大妖精

「(恐悦です……)」

チルノ

「ね!?!いい案でしょ!?!」

大妖精

「……うん、良いんじゃないかな!?!」

レティ・ホワイトロック

「(……リリー、どう思っ?)」

リリーホワイト

「(……あとで大ちゃん慰勞会だねレティさん。)」

・ そんなことも起きている事も知らずに移動。あそこにいるのは……

霧雨魔理沙

「すう……………」

アリス・マーガトロイド

「くう……………」

博麗霊夢

「（仲が良いこと……………」

仲良く肩を並べて睡眠中だ。まるでお互いがお互いの肩を抱き合っているように見える。

???

「（おお～レアな写真が取れそうです！）」

博麗霊夢

「（あー、アンタか、鴉天狗。）」

射名丸文

「（新聞記者のこの射名丸文、スクープがあればどこへでも駆けつけます！！）」

博麗霊夢

「（写真勝手に取るのはいいけど選んで使ってね…………）」

射名丸文

「（了解です。）」

そう言つて、パシャッ、っと一枚撮つてどっかへ飛び立つ射名丸。

ちゃんと小声で会話してくれたのがなんとも言えない優しさ。ちよ

っと驚いた霊夢。気を取り直して他の場所へ移動。あとは…………

・
・

博麗霊夢

「あんたら、こんなところで何やっているのよ……………」

八雲藍

「話すと長いが……一言で言つと『避難所だ』」

八雲橙

「よく分からないけどひなんじよです!」

メディスン・メランコリー

「私は『居候』」

博麗霊夢

「今暇だから長い部分言つてくれる?」

八雲藍

「紫様がハメを外しすぎると私にいろいろやらすのでかなり危険だから逃げてきただけだ。それに……」

耳打ちして

八雲藍

「（最近橙にまで手を出してきた。橙には絶対にさせたく無い。）」

八雲橙
「？」

八雲藍
「ああ橙何でもないんだ。ちよつとな。」

八雲橙
「はあ、そうですか。」

博麗靈夢

「まあ二人とも、紫は幻想郷一ダメな妖怪だから頑張つて。あと橙おなか痛くなつたらすぐ藍に言っただよ？」

八雲橙
「は〜い」

八雲藍
「!!!!!!」

メディスン・メランコリー
「ふふふふふ……後でスーさんに伝えておこ……」

八雲藍がびっくりしているがただ単に藍の頑張りを見てちよつと感

動した為お礼をしてあげただけだ。たまにはこういうことも悪くないというかスーさんって『鈴蘭』のことというか最後までどうでもいい、と霊夢は思う。……………あそこにいるのは、

博麗霊夢

「あら、あなたは一人酒？」

風見幽花

「もともとリグルがいたけどすぐにダウンしたわ。詰まんないわねえ。」

博麗霊夢

「あんたが酒に強すぎなだけよ。どうして強い妖怪は酒に強いのかしら。」

風見幽花

「私を知るわけ無いわ。もう一本頂戴。」

博麗霊夢

「げ、これで七本目！？どっただけ飲んでいるのよ!!」

風見幽花

「別に良いじゃない。それよりも詰まらないから……あら、行っちゃった。」

酒の無くなりやすい原因と巻き込まれそうなことの怒りと恐怖から立ち去った。リグルは大丈夫なのだろうか？さっき永遠亭の場所にいたから大丈夫だろう。そろそろ神社に戻らなければ。そう思ったのでルートを変更。

小野塚小町

「ぷは、久しぶりの酒さね。」

四季映姫・ヤマザナドゥ

「小町、行儀が悪いです。いっつも毎回……」

説教は聞きたくない。そそくさと通過。

十六夜咲夜

「あちよつと待って。料理で酒使うから一本貸して」

博麗霊夢

「はいこれ・・・あなたはあっちの方に行かなくていいの？」

霊夢が指をさす方向には

レミリア・スカーレット

「たまにはこういうのもいいわね。」

紅美鈴

「頑張つて酔拳マスターしてみようかな！」

パチュリー・ノーレッジ

「……………一日酔いになっても知らないからね。」

フレンドール・スカーレット

「うーやーたー」

レミリア・スカーレット

「フラン、意味の分からない行動しないで。行儀が悪いわよ。」

フレンドール・スカーレット

「え？ただ腕と足伸ばして背中ぐるぐる回っているだけだよお姉ちゃん。」

パチュリー・ノーレッジ

「ずず……………酒なんて久しぶりね。」

美鈴

「ほわわくらくらする〜」

などということが起っている。

十六夜咲夜

「ええ、行きたいのは山々だわ。でも……………」

つげる言葉は

十六夜咲夜

「これは私がかけた迷惑の代償としていろいろ作っているだけよ。
こんな安いことで返せるわけ無いけど。でもないよりはマシだわ。」

「

博麗霊夢

「へえ……………あんたもいろいろ考えてるのね。」

十六夜咲夜

「私にだって罪の意識はあるわ。」

博麗霊夢

「ふうん……………ま、背負い込み過ぎないようにな。」

そう言って立ち去る。

さて、もうすぐ博麗神社に着きそうだ。みんな思い思いにやっ
てくれて正直ほっとした。みな、恐れているのではないかと思っ
たが杞憂に終わった。本当は、このまま何も無くて終わって欲しいと
思う。しかし霊夢の勘はそうは言ってない。これから、更に何かあ
ると言っている。

「はあ……………何かあるのかしら……………」

そうは言ってもすぐに何か起きるわけではない。いちいち考えても
無駄だ。今はこの時間を楽しもう。そう考え、再び霊夢は宴の中
に戻っていく。

「宴の終わりが、”宴”の始まりよ……ふふ……」

その声は誰だか分からない。

宴の始まり（後書き）

こんにちは、 靈刀村雨丸です。

まあ深淵……新年明けましておめでとございます。私はとても嬉しくない！

すごいね13話目だぜ？アニメだと1クール＋番外編だぜ？頑張った俺。

えー、最後まで読んでくれた皆さん、今までありがとうそして今年もよろしくお願いします。

破滅の宴(前書き)

サイドストーリーと一話目ぐらいの勢いです

破滅の宴

「今日は盛大に賑やかねー……………はぁ……………」

宴が始まり、みんなが思い思いに楽しんでいる。この盛大さとは逆に霊夢の心は暗くなるばかりだ。

「まあ溜息ついても何も変わらないわ。混ざりに行くわ。」

そう言って、会場に酒を持って向かう。

幻想郷。忘れられた物、もしくは者のみが入ることの許される場所。そんな幻想郷と現実世界を隔てているのが博麗神社。今ここ博麗神社では宴会の真っ最中だ。

チルノ

「ううう………眠い………ZZZ………」

レティ

「………ようやく寝たわね。さ、大妖精こっちにいらっしやい」

大妖精

「は、はい」

リリー

「まあまあそんな固くならなくていいから」

レティ

「そうよ。固いと私たちまで緊張するわ。」

大妖精

「じゃあ、お言葉に甘えて……………疲れた……………」

レティ

「そつでしよつね。ハイこれお酒。」

リリー

「かんぱーい」

大妖精

「ありがとつごぞいまーす。っともつ面倒見るのは大変ですね」

リリー

「大変そつだねえ」

大妖精

「結構世話が焼けます」

レティ

「今はそんなことは忘れて酒やらつまみやらつまんで飲みましょつ。」

「

大妖精

「あ、じゃあそこの軟骨揚げ下さい。」

レティ

「はい……って渋いわね」

リリー

「なんこつ？」

大妖精

「咲夜さんがどっかからとって来たらしいんですけどとてもおいしいんですこれ」

レティ

「それは言ってる。リリーも食べる？」

リリー

「食べたらい」

大妖精

「ハイこれ一つ上げます」

リリー

「どーもー大ちゃん……………むぐむぐ……………!!!!」

レテイ

「……リリー、目が漫画見たく星になってるわ」

大妖精

「すごい気に入ったようですね」

リリー

「やべえこれちょー美味い!!」

大妖精

「リリーさん言葉が……」

リリー

「あ、素で言っちゃった。あはは」

大妖精

「素!？」

レテイ

「いきなりすごい事言い出すから注意してね。」

大妖精

「ほえー」

リゲル

「うげー……………気持ち悪い……………」

てゐ

「……………」

天子

「もう……………ダメ……………」

優曇華

「今日は飲みすぎが一人、絞られすぎが一人、調教されまくりが一人……まあ軽い方ですね。リゲルさんはあとで薬渡すとして、てゐには……精力活性剤と勿忘草わすれなくさの薬、天子さんはそのまま放置プレイ。」

天子

「私だけそのまま!?!」

てゐ

「……もう死ぬって……」

リゲル

「うげ……」

そんなこともありつつ宴は盛大になり、賑やかになっていく。

そして宴は最高潮になり、萃香とミスティアがシメに歌って衣玖が踊りプリズムリバーが演奏して大はしゃぎしたところで宴は幕を閉じた。紫達は隙間を使って白玉楼メンバーと一緒に帰り、衣玖は天子を肩に担いで空に飛んでいき、永遠亭と竹林メンバーは優曇華が永琳、輝夜がてゐ、妹紅が慧音を背負ってそれぞれ帰っていった。妖精たちもチルノを背負って湖に行き、結局残ったのは

霊夢

「結局後片付けは私の仕事なのね」

魔理沙

「いんや私も手伝おう」

アリス

「そうね、何もしてなかったし」

咲夜

「私も残ってるわ」

妖夢

「手伝って来いって言われて来ました」

前の異変組メンバーだった。もちろんどうでもいいが魔理沙たちが写真に収められていることは言わない。

咲夜

「私は調理の残りをどうにかするわ」

妖夢

「ビンを回収してきまーす」

アリス

「じゃあゴミ拾いかしら？」

魔理沙

「適当に箒に乗って回ってくる」

そう言って、咲夜は残飯処理、妖夢とアリスはゴミ拾い、魔理沙は

どっか行ってしまった。

霊夢

「ありがたいわね。私は神社周りを掃いていよう」

そう言って、竹箒を持って境内を掃除しました。

「さあ、破滅の宴の開幕よ。」

「今日も夜は暗いわね。まるで新月みたいな……！」

霊夢は気づいた。何かがおかしい。先ほど、空は半月だったはずだ。しかしこの月光量は異常に少ない。そう思って急いで空を見上げると

「……！」

月に、漆黒の翼を持った、少女の影が一つ。

その少女は漆黒の翼を広げる。すると、月が瞬く間に再生し、満月になった。しかし月が、

「紅い……!!」

人工皆既月食。少女は、月の光まで操作できるのだ。そして一つの動作を見る。

「……………!!」

彼女の翼が、博麗神社周りを覆い囲む。霊夢、魔理沙、咲夜、アリス、妖夢は捕まった。

「おい霊夢!どうなってやがる!!」

「知らないわよ!!」

「参りましたね……………漆黒の壁が抜けられません……………」

「自分の家の人形に通信が取れないわ」

「多分元凶はあれね」

皆が集まったところで咲夜が指を指す。そこには、紅い満月と、

「そうよ。私が元凶」

漆黒の翼を生やした病的に白い少女が舞い降りた。

「あんた……!!」

「そうよ。多分誰も覚えていないでしょうね。覚えていたとしても分かるかしら?」

霊夢は、分かってしまった。彼女の名は……

「一応名乗っとくわ。名前はルーミアらしいわよ。」

暗闇を操る妖怪、ルーミアだった。しかし、いつもと外見が違う。咲夜みたいに服が変わっているわけでも無い。変わっているのは……

「頭のリボンが……」

「無いわね」

妖夢とアリスが指摘した通り、リボンが無くなり、その代り頭の近くに三角形の物体が飛んでいる。

「このリボンは妖力を上げるのと同時に……」

「同時に……？」

魔理沙が疑問の声を上げる。返答は、

「能力封印機構らしいわよ」

「能力封印機構？」

「私が乗り移った時、何か体がの中に封印されていた。私はちょっと興味があつてその封印機構を解いたわ。かなり厄介だったけど何とか出来たところ、それこそ人工皆既月食を起こせる妖力と能力があつた」

「そんな……」

「そして、今から私は幻想郷を抜け出す。」

「は？」

「私は、人間界に捨てられたのよ」

「どういう事だ？」

「その通りの意味よ。私は人間界で捨てられ、憎しみを持ち、その結果怨霊となったわ。」

「繋がり方が分からないわ。どうしてまた人間界に行くのよ？」

「簡単よ。簡単に私を捨てた人間界を混沌に陥れさせるわ。」

「……は？」

「要するに、全てを破壊する。この幻想郷も、外の世界も、何もかも」

「本気？」

「本気」

「それは困るわね」

霊夢は懐から御祓い棒を取り出す。それに続き魔理沙が箒、アリスが人形、妖夢が一本の刀、咲夜がナイフを取り出す。

「私を止めるの？あいにく負ける要素が無いわ。」

ルミアの手に漆黒が集まり一本の大きめの剣を作る。モチーフは十字架。

「皆、来るわ」

「分かっている」

「人形も持ってきて良かったわ。」

「いける・・・！」

「時間操作に問題無し」

「本気なのね。」

ならば

「私も本気で行かせてもらっわ。」

ルーミアは一つの符を発動する

「宵符『ストウームブリンガー』!!!」

ルーミアの剣が邪気をまとい刀身が二倍になる。

「何!?!」

「まだまだ序の口」

魔理沙の叫びに答えるルーミア。そして、

「影を操る力を見せてあげるわ」

破滅の宴（後書き）

こんにちわ。 靈刃村雨丸です。

やっと書く暇が出来たので書かせていただきました。今回は字数が少なめです。そしてバトルはお預け。

一番ネタが無くて、一番出したかったのがこれ、E x ・ルーミアです。かつこよくない？だからかなり気合が入っております。でもネタが無い。だから気合で補いたい！

破滅の宴・弐（前書き）

ちよつと文章が短めですが生暖かい目で見てください

破滅の宴・弐

私は、幸せだった。

私の、お父さんとお母さんがやさしくしてくれた。

私が、嬉しい時は一緒に喜んでくれて、

私が、悲しい時は慰めてくれた。

私は、そんな生活がとても楽しかった。

でも、そんな日は唐突に消える。

それは、私が中学生の時だった。

私はお父さんとお母さんと三人でショッピングに出かけた。とてもはしゃいだ記憶がある。

そして、事件は起こった。

「嫌！離して！！」

「叫んでも無駄だ。撃たれたいか？」

「嫌あ！！」

私は強盗犯に捕まり、人質となった。誰もが焦っていた。あの子をどうやって助けるか、どうしようとか。そんな声が聞こえた。私の頭には、拳銃が一丁押しつけられていた。引き金を引けば、たちま

ちどつなるかは目に見えている。

強盗犯は、金を出せと脅していた。店員はあわててレジを開け、何かを用意している。私は、どうなるのか。その時だ。

「やめろおおおおお!!」

不意に、私は突き飛ばされた。強盗犯が突き飛ばしたのだ。私は床に投げられた後振り返ると、お父さんが強盗犯と戦っているではないか。そして、お父さんは強盗犯の拳銃を手から吹き飛ばしたが、

「がッ!!」

強盗犯のエルボーで吹き飛んでしまった。お父さんはもがいている。

「.....!!」

強盗犯はこちらに気づき、ナイフを振りかぶって向かってくる。私の足元には、拳銃があった。

「!!--」

私は、分かってしまった。殺さなきゃ、殺される。私は、死にたくない。死にたくない。死にたくない。

「ない!!」

そして、私は拳銃を手に取り、引き金を引いた。

私は、その後をあまり覚えていない。でもこれだけは言える。私は『人殺し』と呼ばれるようになった。周りから、友人から、果ては

見知らぬ人から。

そして私はある時、殺された。殺した張本人は、父と母であった。
毒殺だった。

どうして愛していた私を殺すのか。その思いは疑問から憎しみとなり、全ての人間を憎悪するようになった。

私のことは忘れられ、とある世界にやって来た。

私は、ある妖怪に乗り移った。体の中に、何か蠢く『物』があった。私は、それを解放した。そして強大な力を手に入れた。この力があれば、人間界に復讐ができる。

「影を操る力を見せてあげるわ。」

「決裂ね。」

霊夢が言い放ち、一歩下がって距離を取る。同じく皆が霊夢に続き

「一歩下がる。そして・・・」

「「「「「！」「」」」」」

「！」

激突する。

音が聞こえる

それは闇の音

それは地面の音

それは風の音

それらは動きの存在音

更に音は聞こえてくる

それは打の音

それは射の音

それは剣の音

それらは戦闘の存在音

武器が走る

弾幕が注ぐ

闇が弾く

動作は回避となり、しかし攻撃となって音を奏でていく

その流れは止まらない

しかし……

「………なかなかやるじゃない」

「くっ………!」

霊夢が声を上げる通り、ルミアにはそれほどダメージが無い。異常な再生力と恐ろしい攻撃と防御と回避の結果だ。異

それに反して、霊夢達は皆体力切れが近い。妖夢は刀が震えており、咲夜はナイフをいくつか落としている。魔理沙は膝をつき、霊夢は御被い棒で立っている。

「でもまだまだね。………蝕符『トータルエクリプス』!!」

五人の足元に漆黒の闇が展開。霊夢と咲夜は間一髪で飛び、逃げ切れたが

「うわっ!!」

「嫌ッ!」

「クソッ!」

魔理沙、アリス、妖夢が喰われた。符の名の通り、闇が彼女らを侵食していく。

「く………そ………レイ………」

「魔………理………沙………」

「皆さん・・・・・・・・他の・・・・・・・・ひ」

そして、

「嘘・・・・・・・・」

「まさか・・・・・・・・」

三人は闇に喰われていった。

「あああああああー!!」

「ッ!!」

霊夢は見た。咲夜が一人で声を上げ無茶をしてルーミアに突っ込んでいくのを。ルーミアは軽々と大ぶりの長刀を振るい、咲夜を翻弄する。咲夜も全力を振り絞りナイフを投射。

霊夢に相反する心が宿る。自分は何もできないのか、そして皆を助けなければならぬ。その螺旋は渦を巻く。そして、『目覚めた』

「小賢しいわね」

そう言い放ちストウームブリンガーを一閃。ナイフついでにメイド

を弾き飛ばす。

「がッ……！」

咲夜は体力切れのせいかガードままならず直撃。そのまま剣に持つてかれる勢いで吹っ飛んだ。もう立ち上がり気配は無い。

「あとは……！！？」

ルーミアは見る。霊夢が邪悪な渦を巻いていることを。その渦は自分ですら畏怖しそうなほどの『闇』。

「オ・オオ……オオ……オオ……」

霊夢が何かをつぶやいている。

「ッ！！」

ルーミアの危機管理本能が警告する。これは完全に危険だ。ルーミアは剣を振りかぶって最高速度で突っ込む。が、

「・・・・・・・・・・悪ヲ持ツテ悪ヲ絶ツ!!」

「何!!」

ルミアは霊夢の邪悪な波動に吹き飛ばされる。そして霊夢の声は

「邪法『ネクロノミコン邪神秘法の力』!!」

霊夢に邪悪な渦が巻き、全身が墮天に染まる。服は霊力を高めるのと同時に動きやすいように変化し、御払い棒は邪気をまとってロッドとなる。霊夢のカラーであった赤が黒くなり、完全に墮天した。

全身には邪悪を、そしてその眼には正義の光を持って。

「嘘……!!」

「悪くないわね。巫女たる私が邪神を下すなんて」

「どうして自我がつぶれないの!？」

「はン、あんたを倒すためよ」

「!?!」

「私の仲間に来てくれたじゃない。その落とし前をつけてあげるのよ」

「……………墮天勝負ね。上等……………!!」

「甘く見ないで?」

二人は距離を取り、ルーミアは闇の大剣、霊夢は漆黒の棒を構える。月が雲からすべて見え、月光が差した瞬間、

「だあああああ!」

「はあああああ!!」

『正義の闇』と『邪悪の闇』が激突する

破滅の宴・弐（後書き）

こんにちは、 靈刃村雨丸です

今回で十五話目。 そんなに書いた実感がありません

さて、 なんと出しちゃいましたEX・靈夢

………え？ダブルスポイラーのエクストラが靈夢だった？こまけえこたあきにするな！！

とまあこんな感じでやってるので次も期待しててください

破滅の宴（前書き）

これで最後です。かなりグダグダですがご了承ください

破滅の宴

紅月が輝く紅い光の中、戦闘が行われている。

「切り裂けッ！」

「甘いッ！」

漆黒の剣が宙を舞い、闇の棒が受け流す。受け流した力を反動に横薙ぎするも防がれる。激しくなる戦闘の存在音はとどまる事を知らない。激突しては離れ、離れては激突する。

「！ ア ！ ！ ウ ！ ！ ！
！ ！ ツ ！」

「イ！ ！！ ！ オ
！ ！！ ！ ツ！」

書き表すことの出来ない咆哮の如く強烈な声は激しさを連れてさらに上がる。そして

「！！！」

大激突。霊夢からの血の線が空間を彩り、ルーミアからの妖力漏れがアクセントをつける。互角なのか御払い棒と漆黒の剣は一切動かない。

突如二人は距離を取り空中に跳躍。そのまま剣を交えていく

空中戦は地上戦とはまるで違う。少しでも衝撃を逃さなければ相手と距離を取られてしまう。よって空中戦は相手の剣の衝撃を自分の力に利用して、その力を相手が利用してくる。

霊夢とルーミアは相手の攻撃を受け流し噛み合った歯車の如く回り込むように武器を振り回す。次第に落下速度、剣戟速度が上がっていく。それは生死の境界を見極めているのであり、自分の存在が確認できることだ。

「……………」

「……………」

一瞬でお互いの距離が離れる。戦闘の中止だ。否、空中戦の中止と呼ぶべきか。地面が近いからだ。それぞれ着地し、お互いを構えながら見据える。紅月は雲に隠れて消えない。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

霊夢の腕に深紅の線が見える。体液が斬撃で流出している。ルーミアも至る所から蒼い妖力が漏れ出している。

一筋の紅い紅月の光が差し込んだ。

「墮封『幻法封神五重結界』！！」

「天体トルミックリズム『惑星天動説』！！」

霊夢の足元に不可解な幾何学模様が現れ正方形になる。その正方形は数を増やし五重となってそれぞれルーミアに襲い掛かる。

ルーミアの目の前に小さな光る弾が出来る。そこから多量の濃紫色

の弾が出て光る『惑星』を中心に大回転する。大竜巻となった弾幕は霊夢に向かう

お互いの符はお互いの符に激突をする。結界が押し、竜巻が裂く。その力は、わずかに、

「行けッ!」

「くッ!」

霊夢の五重結界が上回った。『トルミックスム惑星天動説』の『惑星』を封印し無効化して三枚のルーミアに飛ぶ。

「ぐああああッ!!」

ルーミアから妖液が飛び散って吹っ飛ぶ。バリッ、とガラスが割れるような音がした。霊夢はおるかルーミアにも聞こえていない。

「終わったのね………はあ………」

霊夢はため息をつく。体が元に戻っていく。今やあの墮天の面影は無く、いつもの博麗神社の巫女、博麗霊夢に戻ったのだ。全ては終わった。終わった。終わったはずだ。

「ッ!!」

顔を上げると致死のダメージを受けたルーミアが

「……………負ける分けにはいかないのよお!」

ボロボロで漆黒の剣を振るってきた

霊夢はどうすることも出来ない。自分の策、自ら墮天する事には成功したがあれはやり過ぎると確実に暴走するということから制限時間を一刻までと決めていた。事実、邪封『幻法封神五重結界』を出したとき、限界を感じた。アレが耐えきれなかった以上、どうしようもない。そして、自分の目の前で剣が唐竹割りに下されて

「させないッ！」

一陣の閃光が飛び散り剣を止め弾き返す

「え？」

「全く……」

「勝手に死んでくれたら困るからな」

「魔理沙！妖夢！」

「私もいるわ」

「アリス！」

見ると、そこにはかつての仲間がいた。どつやらガラス音は符を破壊した音。

「くっ……」

後ずさるルーミアしかし、

「逃げちゃ駄目よ？」

「……」

咲夜に肩を掴まれた。霊夢の飛ばした符の一枚は咲夜の回復に向かった模様。咲夜はそのまま足を払い体制を崩させ上に放り投げる。

「今よ！」

「私達の落とし前をつけようじゃないか。恋符『マスタースパーク』！」

「これで御仕舞よ。呪詛『蓬莱人形』！」

「はあああああ！断霊剣『成仏得脱斬』！」

「お嬢様を傷つけた恨みを貴女に。幻葬『夜霧の幻想殺人形』！」

「これでとどめ………神霊『夢想封印』！」

「断呪神葬恋『堕天形封刃マスターブレイク』！！」

皆の符は一つとなり、それぞれの符の特徴を生かした合成符となつた。皆の心の符は真っ直ぐとルーミアに届き、貫いた。

「あー今日もいい天気ねー」

それは博麗神社。今日も誰も来ないが平和にのんびりと箒を掃いているのは博麗霊夢。

あの宴会の後の事件が起きて数日後。今までが嘘みたいにも何も起きない。

その後、『謎の皆既月食！』とか言われて取材が来たのは撃退したがまあ今までの事を振り返ってみると

「………うん、面白かったかな」

たまにはこんなことも起こっていいとちょっと思った矢先、

「おーい霊夢！」

「何よ魔理沙！」

「まあ話を聞け。」

そう言われたので箒に乗ってやって来た魔理沙をおろし聞いてみる。

「実は噂なんだが……………（ごにょごにょ）」

「……………え!?!」

魔理沙から聞いた内容は、

「山に新しい神社が出来たって!？」

破滅の宴（後書き）

こんにちわ、 靈刃村雨丸です

今回で最終とさせていただきます。

皆様、最後までこの駄文に付き合っして下さいましてありがとうございます。
いました。

出来れば番外編もちよくちよく書いてみようかと思えます。 まあ無理だけどね（爆）

本当にありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9161n/>

東方反乱録 ~ revenge battle! ~

2011年2月4日10時49分発行